

野殿北屋敷・西殿遺跡

一県営農免農道整備事業野殿地区に伴う
岩井、野殿地区遺跡群発掘調査報告書一

1988

群馬県安中市教育委員会

野殿北屋敷・西殿遺跡正誤表

ページ	行	誤	正
図版目次	2	欠落	M-1号堀3区
図版目次	15	H-9号住居址	H-9号住居址、H-3号住居址
図版目次	24	M-1号堀	M-1号堀
図版目次	33	M-1号堀	M-1号堀
4	第2図	欠落	縮尺1:25,000
8	第6図AB	222.5m	224.0m
37	第2表4	外面:内面	外面、内面
37	第2表6	器高14.5	器高32
37	第2表7	器高14.5	器高24.5
52	12	中東耕志	中東耕志

野殿北屋敷・西殿遺跡

— 県営農免農道整備事業野殿地区に伴う
岩井、野殿地区遺跡群発掘調査報告書 —

序

安中市は群馬県の西毛地域のほぼ中心に位置します。市の中央を西から東へ碓氷川が流れ、それに沿って緑豊かな田園風景が広がっています。野殿地区は市の南西部に位置し、養蚕がさかんで、桑園が一面に広がっています。

このたび、野殿地区に農作業用の幹線道路として、県営農免農道が建設されることになりました。しかし、埋蔵文化財の存在することが予想されました。試掘調査を実施して、遺跡の存在を確認したところ、野殿北屋敷、西殿遺跡の存在することが明らかとなりましたので、本調査を実施いたしました。

野殿北屋敷は近世の屋敷の堀跡が確認されました。また、西殿遺跡からは奈良時代、平安時代の集落の一部が発見され、住居10軒のほか、倉庫の跡も確認されました。また、この遺跡からはこのムラで使われたたくさんの遺物も出土しており、古代の開墾集落の様子や人々の生活のありさまを垣間見ることができました。そして、安中の古代史に1ページを加えることになりました。

こうした、埋蔵文化財はかけがえのない郷土の遺産であります。市民の皆様にも郷土の歴史を学習していただけるよう、社会教育、学校教育の場で広く活用を計り、文化財愛護の精神を広く普及するよう努めてゆく所存であります。

最後に、発掘調査に御協力いただいた地元の皆様には厚くお礼申し上げたいと思います。また、稀にみる猛暑の中を発掘作業に従事していただいた作業員の方々の労をねぎらいたいと思います。

昭和63年3月

安中市教育委員会

教育長 多 胡 純 策

例 言

1. 本書は群馬県が行う県営農免農道整備事業野殿地区に伴う、岩井・野殿地区遺跡群埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 遺跡の名称は野殿北屋敷（略称H-1A）と西殿遺跡（略称H-1B）である。
3. 試掘調査は昭和61年度文化財保存国庫補助金、県費補助金を受けて安中市教育委員会が実施し、本調査は県からの委託金と昭和62年度文化財保存国庫補助金、県費補助金を受けて安中市教育委員会が実施した。
4. 調査は試掘調査を昭和61年12月9日から昭和62年1月9日までの間実施し、本調査を昭和62年7月13日から10月8日までの間実施した。また、遺物整理は昭和62年1月12日から3月31日までの間と昭和62年10月12日から昭和63年3月10日までの間、断続的に行った。
5. 調査は安中市教育委員会社会教育課大工原豊が担当し、試掘調査では松本豊、瀧野巧（調査員）がこれを補佐し、本調査では松本、千田茂雄（調査員）が補佐した。
6. 本書の編集は大工原が行い、執筆分担は次のとおりである。なお、山崎一氏（群馬県文化財審議会委員）に調査に至るまで及び、調査期間中は多大なる御指導、御助言をいただき、付編「野殿北屋敷」の玉稿を賜った。
大工原 I、II、III、IV、V-1、2-(1)、VI-1、2
千田 V-2-(2)、(3)、VI-3、4
7. 遺構、遺物の写真撮影は大工原、千田が行った。
8. 本遺跡の出土遺物は安中市教育委員会で保管している。
9. 調査組織は次のとおりである。
安中市教育委員会事務局
社会教育課長 茂木勝文 主任 松本 豊
社会教育係長 反町良一 主事 田中秀雄
主任（社教主事） 森泉寿義雄 主事 大工原豊
主任 萩原 昭 調査員 千田茂雄
(昭和62年3月転出) 調査員 瀧野 巧(昭和62年3月転出)
10. 調査の期間中次の方々に御指導、御協力いただいた。厚くお礼申し上げます。（敬称略）
岡田初男、小安和順、河井丈夫、志村 哲、茂木 昇
11. 発掘調査及び遺物整理従事者は次のとおりである。（敬称略）

試掘調査（昭和61年度）

大塚光基 片桐佳子 金井武司 後閑修市 下マス江 神宮幸四郎 高木公太郎 田中重一
田中利策 長岡政江 松本文作

本調査（昭和62年度）

岩坂尚子 岡田早百合 小川久江 小川正子 片桐佳子 金井武司 河井 清 神成のぶ
斎藤説成 佐藤厚子 下マス江 神宮幸四郎 高木公太郎 高橋理樹 田中利策 中川京子
松本恭子 松本文作 峰岸喜久江 茂木 昇 横山晴恵 吉沢秀子

凡 例

1. 遺構の縮尺は次のとおりである。

住居址、カマド、溝： $\frac{1}{60}$ H-2号住居址カマド： $\frac{1}{60}$

堀： $\frac{1}{200}$

2. 遺物の縮尺は次のとおりである。

坏、皿、蓋、刀子、青銅製金具等： $\frac{1}{6}$

甕、鎌、砥石： $\frac{1}{6}$

縄文土器、石器： $\frac{1}{6}$

3. 住居址実測図中、スクリーントーンで示したピットは住居址に付随するものを示している。

目 次

本文目次

序	
例 言	
凡 例	
I 調査に至る経過	1
II 調査の方法と経過	1
1 試掘調査	1
2 本調査	2
III 遺跡の地理的・歴史的環境	3
IV 基本層序	6
V 遺跡各説	7
1 野殿北屋敷	7
(1)遺跡の概要	7
(2)近世の遺構と遺物	7
2 西殿遺跡	10
(1)遺跡の概要	10
(2)縄文時代の遺物	10
(3)奈良・平安時代の遺構と遺物	12
VI 成果と問題点	45
1 野殿北屋敷の成立時期について	45
2 西殿遺跡における集落の変遷について	45
3 住居址の壁外柱穴について	48
(1)H-1号住居址	48
(2)H-2号住居址	48
(3)H-10号住居址	48
(4)小 結	50
4 墨書土器について	50
参考文献	52
付編 野殿北屋敷	53

挿 図 目 次

第1図 調査区設定図	3
第2図 野殿北屋敷、西殿遺跡の位置	4
第3図 野殿北屋敷、西殿遺跡と周辺遺跡	5
第4図 基本層序柱状図	6
第5図 野殿北屋敷調査区全体図	①
第6図 M-1号堀土層断面図	8
第7図 1号井戸、2号井戸実測図	9
第8図 西殿遺跡全体図	①
第9図 縄文時代の遺物	11
第10図 H-1号住居址実測図	13
第11図 H-1号、H-2号住居址出土遺物	14
第12図 H-2号住居址実測図	15
第13図 H-10号住居址実測図	16
第14図 H-10号住居址出土遺物	17
第15図 H-3号、H-9号住居址実測図	19
第16図 H-9号住居址出土遺物(1)	20
第17図 H-9号住居址出土遺物(2)	21
第18図 H-4号住居址と出土遺物	22
第19図 H-5号住居址実測図	23
第20図 H-5号住居址出土遺物	24
第21図 H-6号住居址実測図	25
第22図 H-6号住居址出土遺物(1)	26
第23図 H-6号住居址出土遺物(2)	27
第24図 H-7号住居址実測図	28
第25図 H-8号住居址実測図	29
第26図 H-7号、H-8号住居址出土遺物	30
第27図 HT-1号掘立柱建物址実測図	32
第28図 HT-2号、HT-3号掘立柱建物址 実測図	33
第29図 HT-4号掘立柱建物址実測図	34
第30図 M-1号溝実測図	35
第31図 グリッド出土遺物	36
第32図 西殿遺跡の集落変遷	47
第33図 H-1号、H-2号、H-10号住居 址壁外柱穴	49
第34図 野殿北屋敷縄張り図	54

表 目 次

第1表	H-1号住居址出土遺物観察表	37
第2表	H-2号住居址出土遺物観察表	37
第3表	H-9号住居址出土遺物観察表(1)	38
第4表	H-9号住居址出土遺物観察表(2)	39
第5表	H-10号住居址出土遺物観察表	40
第6表	H-4号住居址出土遺物観察表	40
第7表	H-5号住居址出土遺物観察表	41
第8表	H-6号住居址出土遺物観察表(1)	42
第9表	H-6号住居址出土遺物観察表(2)	43
第10表	H-7号住居址出土遺物観察表	44
第11表	H-8号住居址出土遺物観察表	44
第12表	グリッド出土遺物観察表	44

図 版 目 次

図版-1	野殿北屋敷遠景、M-1号堀全景 M-1号堀土層断面、1号井戸、2号井戸
図版-2	西殿遺跡遠景、調査区、H-1号住居址・H-2号住居址、H-1号住居址カマド
図版-3	H-2号住居址カマド、H-4号住居址カマド、H-5号住居址、カマド、 棚 状遺構、H-6号住居址、遺物出土状況
図版-4	H-6号住居址遺物出土状況、H-6号住居址カマド、H-7号・H-8号住居址、遺物出土状況、H-8号住居址カマド、青銅製金具出土状況、H-9号住居址、遺物出土状況
図版-5	H-9号住居址鎌出土状況、砥石出土状況、土層断面、カマド、カマド土層断面、H-10号住居址、遺物出土状況
図版-6	H-10号住居址土層断面、カマドHT-1・2・3・4号掘立柱建物址、M-1号溝土層断面、M-1号溝全景、遺物出土状況、H-1号住居址入口部分、M-1号掘調査スナップ
図版-7	H-1号、H-2号、H-9号、H-10号住居址出土遺物
図版-8	H-4号、H-5号、H-9号住居址出土遺物
図版-9	H-5号、H-6号住居址出土遺物
図版-10	H-6号住居址、グリッド出土遺物、M-1号掘出土遺物 H-7号、H-8号住居址

I 調査に至る経過

昭和60年10月、公害防除特別土地改良事業に係る基幹道路（県営農免農道）建設に関連して、文化財の有無について、意見を求める照会が、安中市でのこの事業の窓口である産業部農業改良課より、市教育委員会にあった。そこで、市教育委員会では該当地域について現地踏査し、埋蔵文化財が存在する可能性のある部分が数箇所あることを確認し、その旨の意見書を市農業改良課へ提出し、県との調整をはかるよう依頼する一方、県教育委員会文化財保護課へも連絡し、今後の対応方法等についての協議を行った。そして、県文化財保護課、市教育委員会、県高崎土地改良事務所、市農業改良課の四者で協議を行い、まず遺跡の範囲を確認するための試掘調査を市教育委員会で実施することになった。

試掘調査は昭和61年12月9日から昭和62年1月9日までの間実施した。その結果、調査以前に城郭研究者山崎一氏によって存在が指摘されていた「野殿北屋敷」の西側の堀跡を確認した。また、字西殿地内において、奈良・平安時代の住居址を数軒確認し、集落遺跡の存在が明らかとなった。

この結果に基づいて、再度四者間で協議を行い、昭和62年度に農免農道を建設するに先立ち、路線予定地内に存在する埋蔵文化財の発掘調査を実施し、記録保存の措置をとることになった。そして、調査は試掘調査に続き、市教育委員会で実施することになった。

II 調査の方法と経過

1 試掘調査

試掘調査は通称「二十二夜様」（字北地内）から「庚申塚」（字堀谷戸地内）の間、約1,200mの区間を対象として行った。「野殿北屋敷」の堀跡と推定される部分には10m間隔で幅1mのトレンチを6本設定し、堀の確認を行った。また、それ以外の部分（字西殿～字堀谷戸間）では、10～20m間隔で2m×4mのトレンチを16本設定し、遺構の確認作業を実施した。トレンチの設定は路線測量用のNo杭を基準として行い、遺構の測量もこれによった。また、重機の使用は用地取得の関係で不可能であったことから、すべて人力により掘り下げを行った。そして、遺構が確認された時点で掘り下げは中止し、写真撮影及び平面図、セクション図を作成し、埋め戻した。

調査は北屋敷から開始し、順次南へ移動する形で行った。北屋敷の調査は昭和61年12月9日から12日まで実施し、西殿遺跡以南の部分は11日から26日まで行い、昭和62年1月7日から9日ま

II 調査の方法と経過

でトレンチ埋戻し作業を行った。試掘終了後は3月31日までの間に若干の遺物整理を実施した。

2 本 調 査

本調査は試掘調査によって明らかとなった北屋敷と西殿遺跡、約1,000m²を対象として実施した。北屋敷は路線センター杭No.12、13を結んだ線を基線（2ライン）とし、No.12杭がB-2となるようにグリッドを設定した。グリッドは4m×4mで北西隅を基点とし、北から南へアルファベットでA、B、C……、西から東へ数字で1、2、3…と呼称することにした。また、堀が細長いので便宜上、北から20m毎に区切り、1区、2区、3区、4区とし、各区の境に土層断面を観察するために幅2mのベルトを設定した。さらに堀の境界を確認するため、3区の西に1m×6mのトレンチを設定した。

北屋敷の調査は試掘調査によって確認されている浅間A軽石層までバックホーにより掘削し、その後はバックホーと人力を併用して、底面まで精査を行った。また、出水のため水を汲み出しながら作業を実施した。精査後は土層断面図及び平面図、コンタ図を作成し、写真撮影を行った。遺物は各区で層毎に取り上げた。

西殿遺跡は路線センター杭No.17、No.18を基線（3ライン）とし、No.17杭をC-3となるようにグリッドを設定した。グリッドは北屋敷と同様に4m×4mで北西隅を基点とし、北から南へA、B、C……とアルファベットで呼称し、西から東へ1、2、3……と数字で呼ぶことにした。

西殿遺跡の調査はまず、バックホーによりIIb層（浅間B軽石層）の存在する部分ではこの上面まで、IIb層の存在しない部分ではIII層からV層上面までの間で、遺構が確認できるところまで掘削した。また、これと並行して人力により遺構、遺物の確認作業を実施した。確認された遺構は原則として南と北から順次精査を行った。遺物は住居址、溝では原則としての分布図を作成しながら取り上げた。また、ピットでは遺構毎に取り上げを行い、グリッド遺物はグリッドを四分した2m×2mの細グリッド毎に層別に取り上げた。住居址では土層断面図、平面図、カマド土層断面図を作成し、必要に応じて微細図を作成した。それ以外の遺構については平面図を作成し、溝では土層断面図、掘立柱建物址では遺構断面図を作成した。また、住居址については原則として、遺物出土状況、土層断面、全景、カマド遺物出土状況、土層断面、全景の撮影を行ったほか、必要に応じて写真撮影を行った。その他の遺構については必要に応じて、その都度写真を撮った。

遺物整理は遺物の水洗・注記→接合・復元→実測・拓本→トレース→写真撮影の順で行い、並行して遺構図面の整理・作成、トレース、各種台帳作成、写真整理を行った。

発掘調査は西殿遺跡から開始し、昭和62年7月13日から10月5日まで実施した。この間稀にみる酷暑のため作業は難行することがしばしばあった。また、北屋敷は9月11日から10月8日までの間実施した。北屋敷は出水のため、作業は困難であったが、日程としては予定通り終了するこ

とができた。

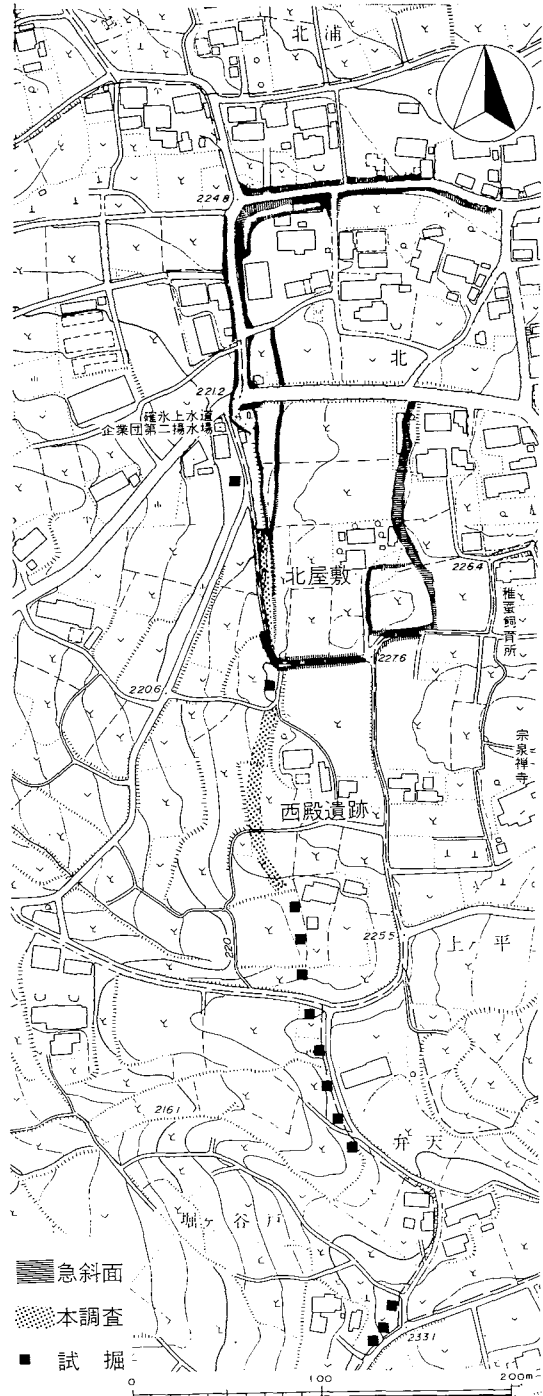
遺物整理は発掘調査の終了とほぼ同時に昭和62年10月7日から開始し、昭和63年3月10日までの間、断続的に行った。当初の予想以上に遺物が検出されたため、作業は遅れがちであったが、予定の日程で終了することができた。

III 遺跡の地理的・ 歴史的環境

野殿北屋敷は安中市野殿字北地内に所在する。今回調査を行ったのはその一部であり、屋敷西側の堀の部分である。地番は字北888番地である。また、西殿遺跡は字西殿1083、1084、1085、1089—3、1094番地に所在する。

野殿地区は安中市の南西部に位置し、碓氷川の左岸（南岸）の丘陵上にあたる。この丘陵は岩野谷丘陵と呼ばれるもので、基盤は第三紀富岡層群であり、その上部を野殿集塊岩により厚く覆われている。山形は老年期末期の様相を示しており、隆起準平原的な地形を呈している。また、野殿の丘陵は岩井川、天神川により東西を隔絶されており、東西北は急な崖に近い傾斜面である。しかし、丘陵の上面はこれに比べるとゆるやかな丘陵性の地形を呈している。

北屋敷はこの野殿地区の中央やや北寄りに位置する。ちょうど、切通しから登った場合、最も高い部分にあたる。この北屋敷は江戸時代初期の小幡氏と関係があると推定されている。北屋敷の南には小幡氏が開いたと伝えられる宗泉寺が存在する。また、北屋敷の北西

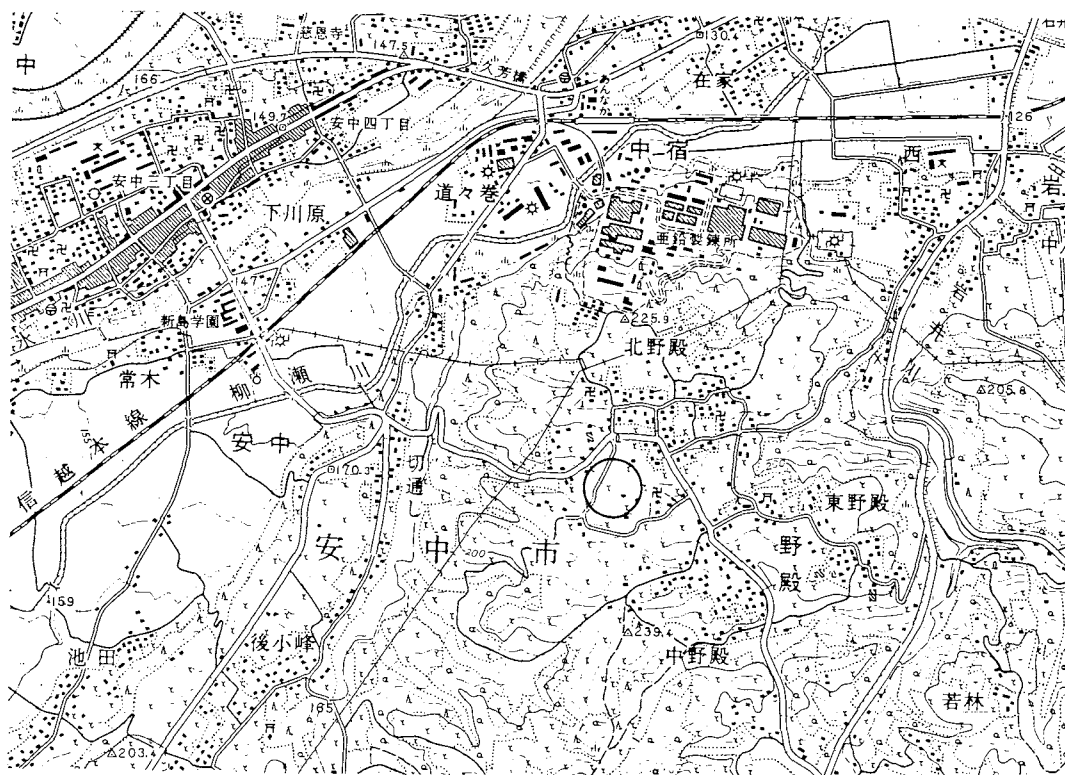


第1図 調査区設定図

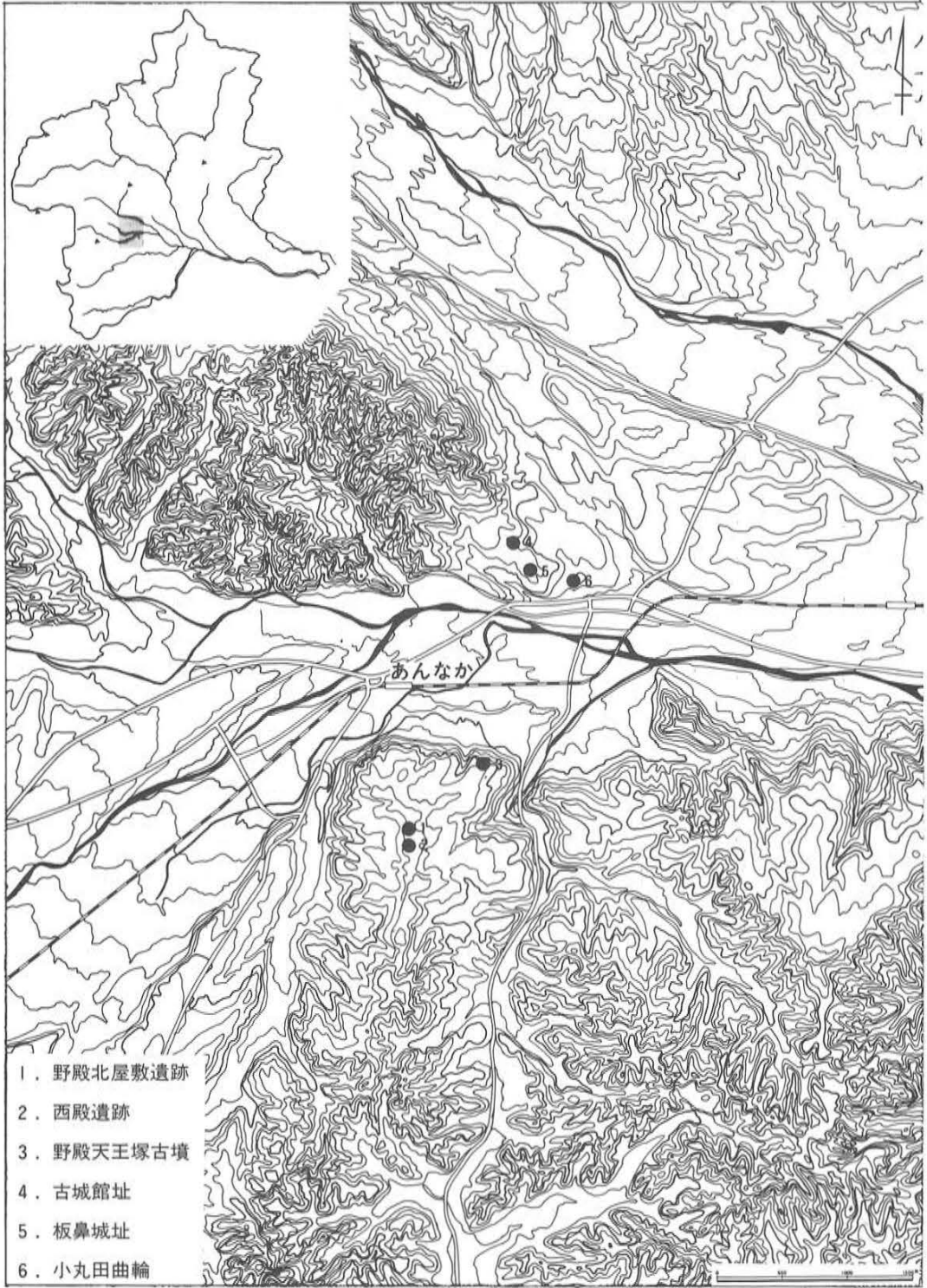
III 遺跡の地理的・歴史的環境

方向には玉椿寺がある。今回調査を行った部分は北屋敷の西側の堀であり、戦前までは水を湛えていたと言われている。しかし、この部分以外の部分では屋敷の遺構については不鮮明であり、堀、土塁等の痕跡を僅かに残すのみである。

また、西殿遺跡は北屋敷の南西方向にあたり、西にゆるやかに傾斜した平坦部である。南側には西から東へ向って大きな谷が入っており区画されている。また、遺跡の中央にも小さな谷が入り込んでおり、西へ向って開いている。一方、東側は平坦部が続いており、遺跡の中心はこのあたりと推定される。



第2図 野殿北屋敷、西殿遺跡の位置



第3図 野殿北屋敷、西殿遺跡と周辺遺跡

IV 基本層序

西殿遺跡の基本層序は第4図のとおりである。また、北屋敷は大部分が堀であるため、自然堆積の状態の部分はほとんど存在しない。堀の土層堆積状況は遺跡各説で述べるので、ここでは省略する。

西殿遺跡ではH～Iラインを中心として谷が入り込んでおり、この部分から南北へ離れるにつれて高くなっており、土層の堆積も薄くなる。A～Dライン及びQ～VラインではII～IV層が存在せず、I層の直下がV層(ローム層)となっている。以下、各層について説明することにする。

I層 暗灰褐色土層 浅間A軽石(As-A 1783年)を多量混入する。現在の耕作土層。しまり粘性ともない。

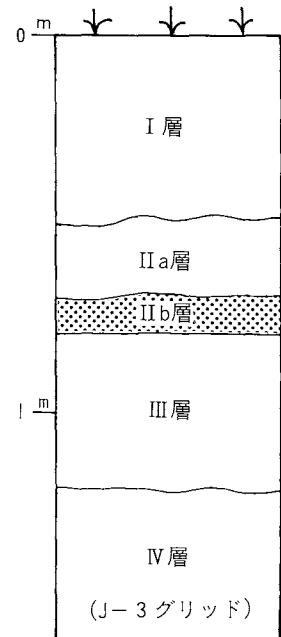
II a層 黒色土層 As-Bを多量混入する。砂質でしまり、粘性はほとんどない。

II b層 灰褐色軽石層 浅間B軽石(As-B 1108年)の純層。層厚は谷部分では8～15cmである。遺構の上部でも窪んで堆積することはなく、この軽石の降下以前に本遺跡の住居は完全に埋まっていたことが確認された。

III層 黒色土層 As-Bを全く混入しない。色調はII a層よりも若干明るい。しまり、粘性はややある。白色粒子を若干混入する。住居址の部分では厚く堆積しており、覆土上層となっている。この層は奈良・平安時代の遺物を多く包含している。

IV層 褐色土層 III層より明るい色調で、しまり、粘性ともある。この層の上面で奈良・平安時代の遺構を確認することができる。この時代の遺構の地山である。縄文時代の遺物をこの層中に若干包含している。

V層 黄褐色土層 この層からローム層であり、IV層との境界面に「スリッコ」と呼ばれる厚さ2～3cmのかたく板状に剥げる面が存在する。しまり、粘性とも強い。



第4図 基本層序柱状図

V 遺跡各説

1 野殿北屋敷

(1) 遺跡の概要

北屋敷は南北140m、東西90mの規模をもつ近世の屋敷部分と、その北に隣接する南北100m、東西140mの中世館址の部分に分けることができる。今回調査を実施したのは、近世屋敷跡の部分の西側を区画する堀の部分である。路線にかかる約62mの部分について、堀を確認した。堀は一直線状であり、「折」は存在しない。また、堀に付帯する作業用道路、井戸が検出された。

(2) 近世の遺構と遺物

M-1号堀（第5図～第7図）

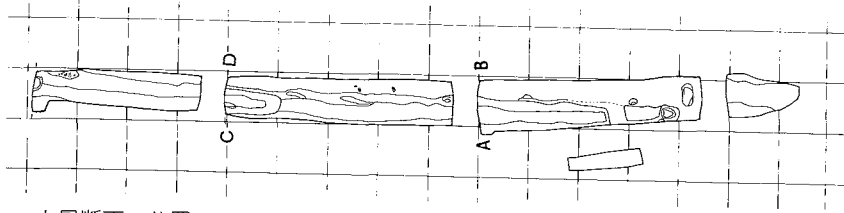
この堀は北屋敷の西側を区画する堀である。堀の形態は箱葉研で、中程に段をもち、傾斜がゆるやかになる部分がある。上幅6m～10m、中段幅約2m、下幅約1m～1.2m、現地表からの深さは最深部で約2mである。2区（G-2、H-2グリッド）には約40cmの段差をもつ部分がある。また、3区（N-2グリッド）には約1mの大きな段差をもつ部分が存在する。

一方、堀の東斜面には5箇所、堀に対して斜めに細い道路状の遺構が存在する。この道路状遺構は、すべて中段の傾斜のゆるやかになる部分で途切れている。F-2グリッドに存在するものはベルトにかかっているため長さは不明であるが、幅は20cmである。H-2グリッドのものは長さ1.7m、幅20～30cmである。I-2グリッドのものは長さ2m、幅20～30cmである。K-2グリッドに存在するものは長さは不明であるが、幅は20cmである。L-2、M-2グリッドに存在するものは長さ4.7m、幅15～20cmである。このほかC-2グリッドには中段上に集石が存在する。

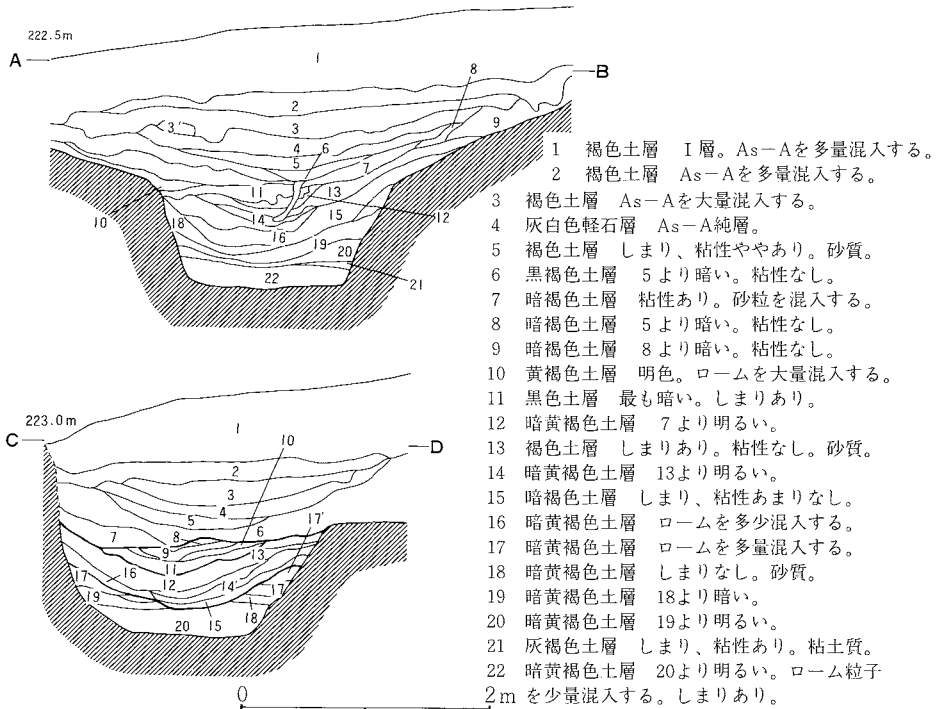
また、土層堆積状態についてみると、基本的にはレンズ状に堆積しており、自然堆積とみられるが、上部のAs-A軽石層はこの堀の部分に寄せられたものと判断される。そして、下層部では不整合面が数面存在している。これは堀の土砂をさらったことによると判断される。

M-1号堀ではこのほかに井戸が2基検出された。1号井戸はC-3グリッドに存在する。南半分のみ調査を行ったが、円形を呈すると推定される。堀の底面で直径1.3m、深さ20cmである。調査中にも絶えず湧水していた。土層堆積状態をみると、底面までAs-Aが大量混入しており、比較的新しいものと判断される。地元の古老の話では、干ばつの際にこの付近に井戸を掘ったことがあるということであり、それに相当する可能性がある。

V 遺跡各説



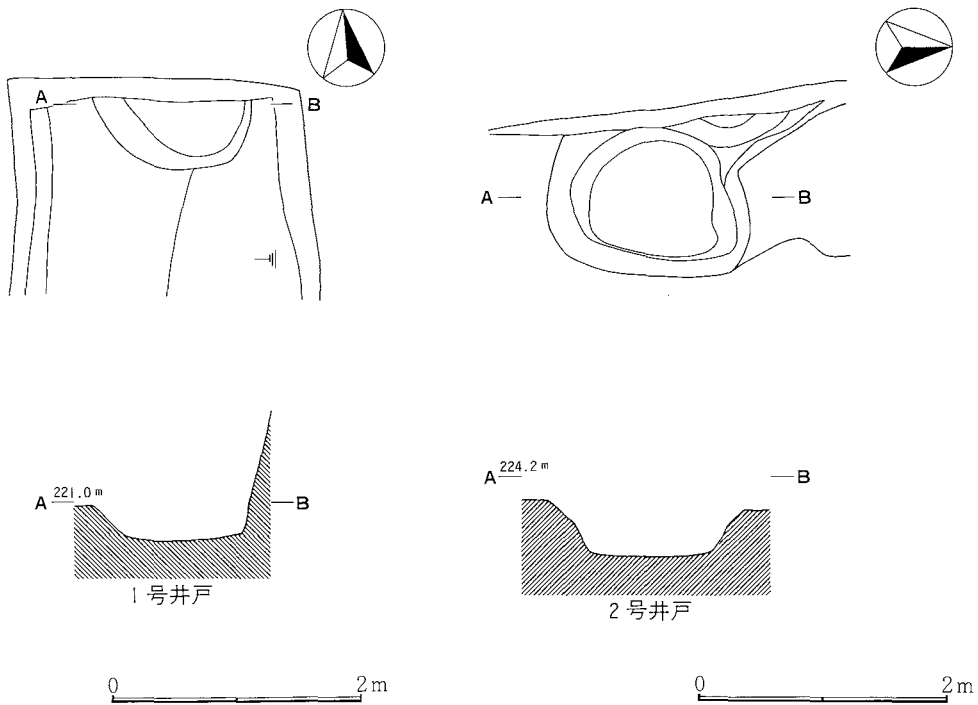
土層断面の位置



- | | |
|--|--|
| <p>1 褐色土層 I層。As-Aを多量混入する。</p> <p>2 褐色土層 As-Aを大量混入する。</p> <p>3 灰白色軽石層 As-A純層。</p> <p>4 褐色土層 しまりあり。粘性ややあり。</p> <p>5 暗褐色土層 4より暗い。</p> <p>6 暗褐色土層 しまりあり。粘性あまりなし。砂粒を混入する。</p> <p>7 暗褐色土層 6より暗い。しまりあり。粘性なし。</p> <p>8 暗褐色土層 6より暗い。しまり、粘性あり。</p> <p>9 褐色土層 8より明るい。粘性あまりなし。ロームを若干混入する。</p> <p>10 暗褐色土層 9より暗い。しまり、粘性なし。砂質。</p> <p>11 暗黄褐色土層 しまりあり。粘性なし。ロームを少量混入する。12との間は不整合。</p> <p>12 暗褐色土層 しまりあり。粘性なし。砂質。</p> <p>13 暗褐色土層 12より明るい。しまりあり。粘性なし。</p> <p>14 暗褐色土層 13より暗い。しまり、粘性ややあり。</p> | <p>1 褐色土層 I層。As-Aを多量混入する。</p> <p>2 褐色土層 As-Aを大量混入する。</p> <p>3 褐色土層 As-Aを大量混入する。</p> <p>4 灰白色軽石層 As-A純層。</p> <p>5 褐色土層 しまり、粘性ややあり。砂質。</p> <p>6 黒褐色土層 5より暗い。粘性なし。</p> <p>7 暗褐色土層 粘性あり。砂粒を混入する。</p> <p>8 暗褐色土層 5より暗い。粘性なし。</p> <p>9 暗褐色土層 8より暗い。粘性なし。</p> <p>10 黄褐色土層 明色。ロームを大量混入する。</p> <p>11 黒色土層 最も暗い。しまりあり。</p> <p>12 暗黄褐色土層 7より明るい。</p> <p>13 褐色土層 しまりあり。粘性なし。砂質。</p> <p>14 暗黄褐色土層 13より明るい。</p> <p>15 暗黄褐色土層 しまりあまりなし。粘性ややあり。ローム粒子を多少混入する。</p> <p>16 暗黄褐色土層 ローム粒子を多量混入する。</p> <p>17 暗褐色土層 しまりあり。粘性ややあり。ローム粒子を少量混入する。</p> <p>18 暗褐色土層 17より暗い。</p> <p>19 黄褐色土層 しまり、粘性あまりなし。YPまたはBPを大量混入する。</p> <p>20 黄褐色土層群 ローム性の土層がラミナ状に堆積している。</p> |
|--|--|

※ 6、7の下面、11の下面、15、16の下面には不整合面が存在する。これは堀さらいの際に形成されたものと推定される。

第6図 M-1号堀土層断面図



第7図 1号井戸、2号井戸実測図

2号井戸はO-2グリッドに存在する。平面形は不整形で、堀の底面で、長軸1.6m、短軸1.2m、深さ43cmである。この井戸の北西隅から溝が出ている。この溝は幅20~25cm、深さ10cmである。この井戸の掘られた時期ははっきりしないが、1号井戸のようにAs-Aは大量に混入しておらず、比較的古い段階のものと推定される。

M-1号堀からは奈良・平安時代の土師器、須恵器片が多く出土しているが、堀と関連する遺物は非常に少ない。下層より「寛永通宝」(図版-10)が検出されている程度である。また、中世の堀では一般的にみられる内耳土器、灯明皿等は全く検出されておらず、近世の堀と判断される。

2 西殿遺跡

(1) 遺跡の概要 (第8図)

本遺跡は奈良・平安時代の集落址であり、今回はその一部について調査を実施した。検出された遺構としては、住居址10軒、掘立柱建物址4棟、溝状遺構1条などである。

住居址は原則として2軒が重複或いは近接する形で存在し、こうしたグループが一定の間隔をおいて存在している。また、10号住居址を除いてすべてカマドを東にもつ。掘り込みが深く、遺存状態は良好であり、H-1号、10号住居址では壁外柱穴が多数検出されている。また、この中において、H-4号住居址は掘り込みが確認されず、カマドだけが検出されており、平地式住居址の可能性がある。

掘立柱建物址はM-1号溝のすぐ南の部分にまとまっており、その関連性がうかがえる。またM-1号溝は平安時代の集落を区画する溝とみられる。

(2) 縄文時代の遺物 (第9図)

a 土 器

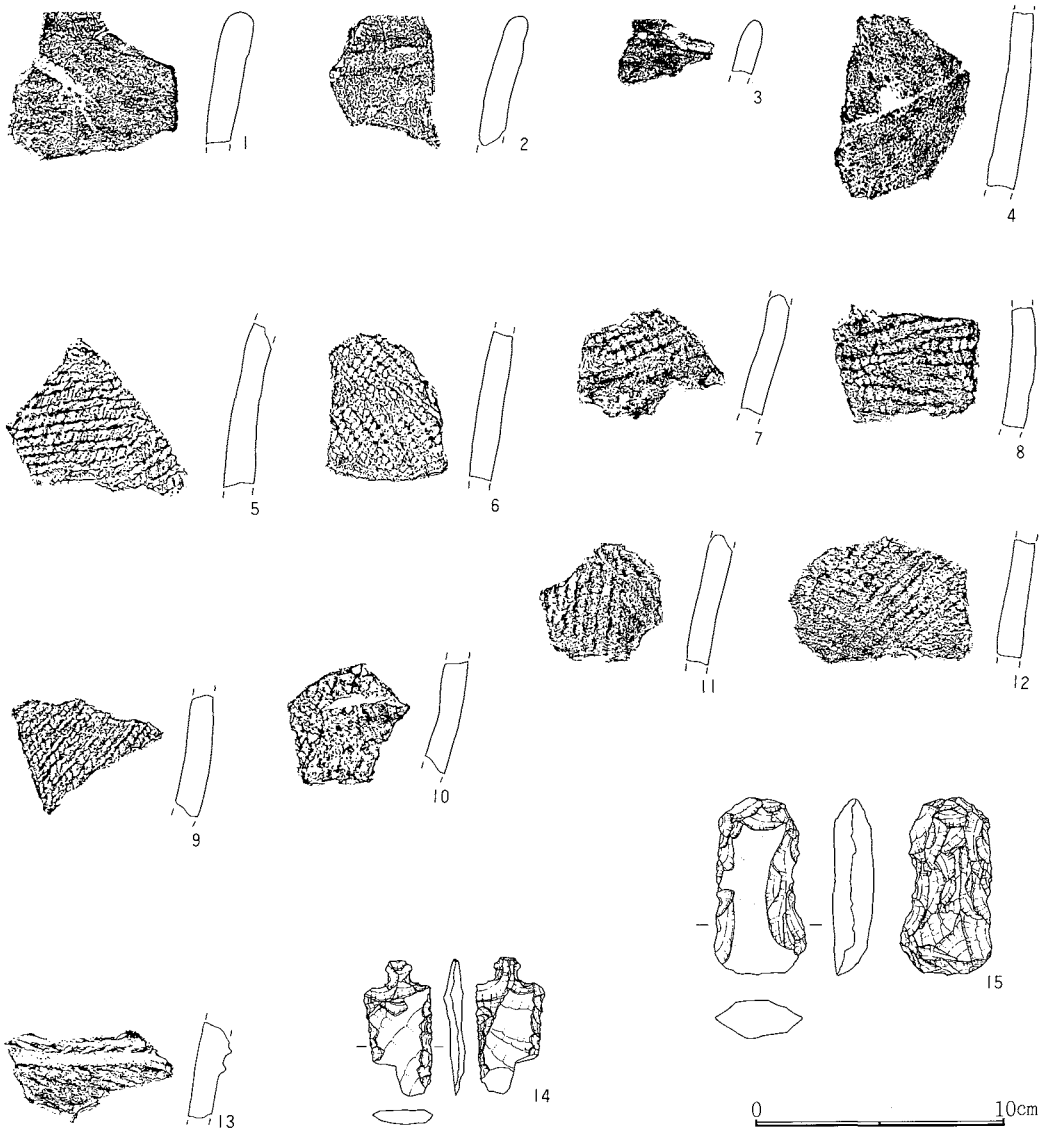
縄文時代の遺構は全く検出することができなかったが、縄文時代の遺物は十数点、確認面より検出された。以下それぞれの土器についてみてゆきたい。

1～12は縄文時代前期前葉黒浜式に属する一群である。1・2・3は口縁部破片で、胎土に繊維を多く混入する。4は胴部破片で、磨滅が著しく、胎土に繊維を混入し、小砂を特に多く混入する。5は胴部破片で、無節斜縄文を施されている。胎土には繊維を多く混入する。6は胴部破片で、単節斜縄文を施し、胎土に繊維を多く混入する。7は胴部破片で、単節斜縄文を施されているが、磨滅が著しい。胎土には繊維を多く混入する。8は胴部破片で、単節斜縄文を施されている。胎土には繊維を多く混入する。9は胴部破片で、無節斜縄文を施され、胎土に繊維を多く混入する。10は胴部破片で、無節斜縄文を施されているが表面が所々剥落している。胎土には繊維を多く混入する。11は胴部破片で、無節斜縄文を施され、磨滅が著しい。胎土には繊維を多く混入する。12は胴部破片で、単節斜縄文により羽状を作っている。胎土には繊維を多く混入する。

13は縄文時代前期諸磯式に属する土器で、二条の刻を持つ浮線文と、単節斜縄文を施される。

b 石 器

14は縦型の石匙で、先端部分を欠損している。基部を両面からの調整剥離で、刃部も両面からの調整剥離により作り出している。石材は頁岩である。15は短冊形打製石斧で、身が厚く、片面に自然面を残している。石材は頁岩である。



第9図 縄文時代の遺物

(3) 奈良・平安時代の遺構と遺物

a 住居址

H-1号住居址 (第10図)

遺構 C-2・3、D-2・3グリッドに位置する。平面形はほぼ正方形であり、規模は長軸約3.9m、短軸約3.8m、確認面からの深さは約50cmと深く遺存状態は良好で壁は鋭角に立ち上がり、壁下に周溝が回る。主軸方向はN-77°-Eを示す。

カマドは、住居東側の南寄りに設けられており、袖部はローム混入の褐色土で作り付けている。

ピットは、住居床面に4基、住居址周辺にこの住居に係わると思われるピット数基が検出された。住居址床面の3基は支柱穴と思われる。また住居南側に3基のピットが対になって6基検出されている。これらのピットは住居の出入口部分の上屋を支えていた柱の柱穴ではないかと考えられる。この他にも、住居址をはさみ北と南で対になるピット、カマドをはさみ北と南で対になるピットが検出された。これらのピットは全て、この住居の上屋を支えた柱の柱穴と考えられる。

この住居址は遺存状態がよく、住居内のみならず、住居周辺の柱穴までも検出することができた。今後、住居址の上部構造を考えて行く上で非常に良好な資料である。

遺物 出土遺物は少なく、坏、盤、甕が検出された。住居址を廃棄した時点で土器を持ち去ったものかと考えられる。

H-2号住居址 (第12図)

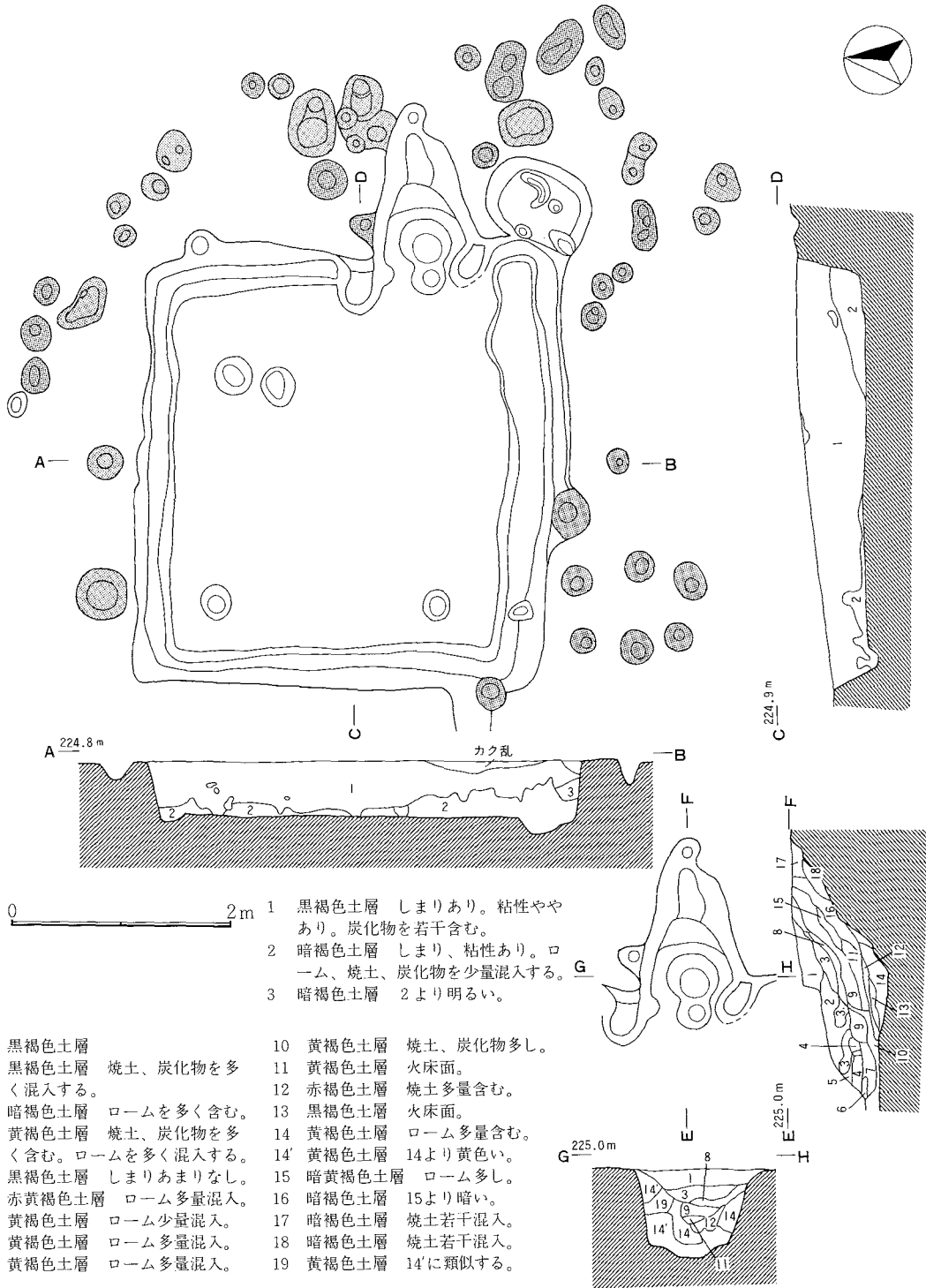
遺構 D-1・2、E-2グリッドに位置し、住居址の西約 $\frac{2}{3}$ は調査区外で調査できず、東壁、カマド、南壁の一部の調査に終わった。この住居も確認面からの掘込みが、約50cmと深く、遺存状態は良好である。壁は鋭角に立ち上がる。壁下に周溝が回り、北壁西側では周溝がオーバーハングする部分がある。

カマドは、住居東側の南寄りに設けられており、袖部はローム混入の褐色土で作り付けられている。煙道は北へ70cm程延び、東端には煙突として使用したと思われる甕(第11図4～6)が3重に重なった状態で検出された。1号住同様、住居に係わると思われるピットが周辺で2基検出された。

遺物 遺存状態は比較的良好であり、煙道にかかっていた甕以外にも、坏、甕が検出された。

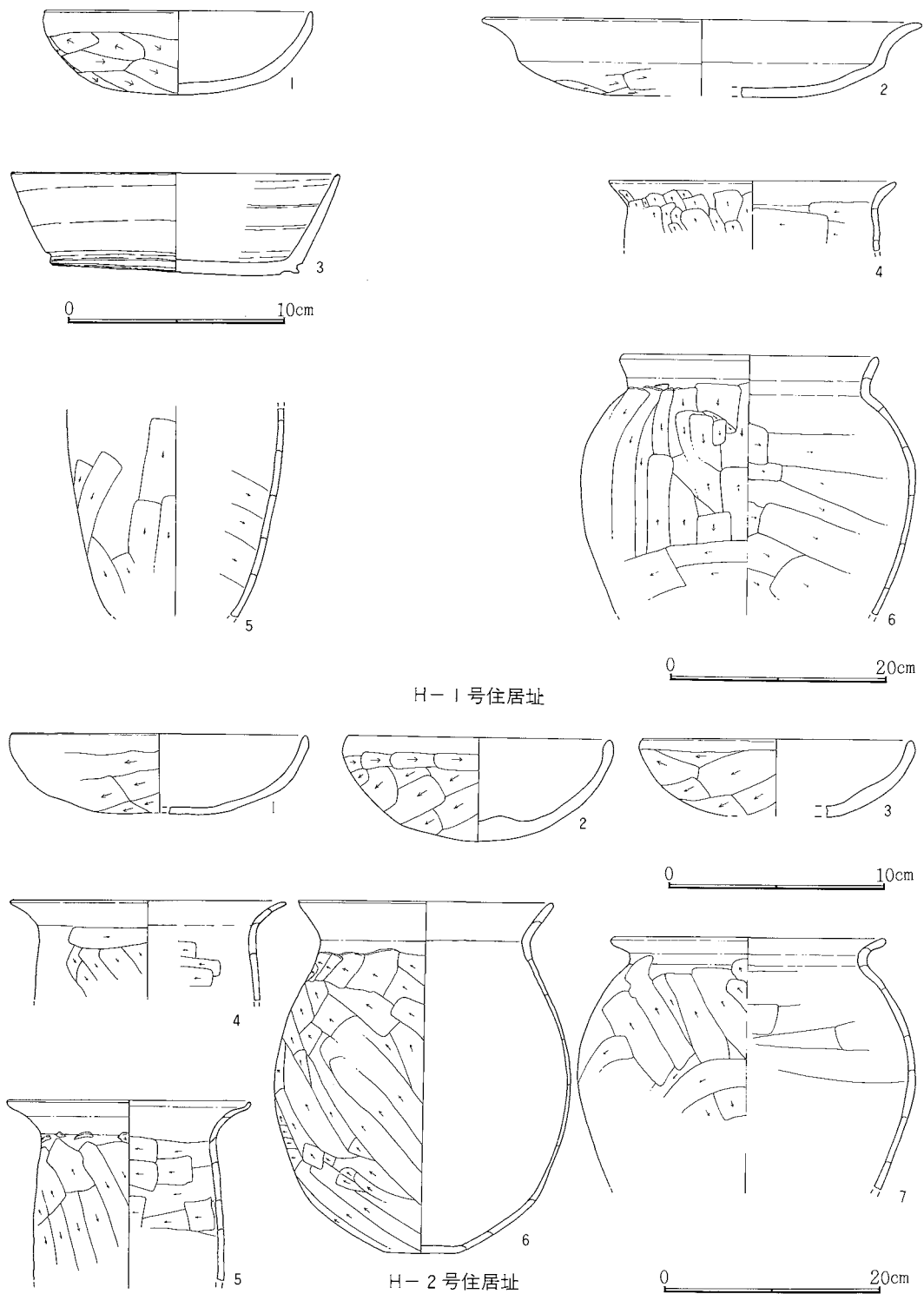
H-10号住居址 (第13図)

遺構 F-1・2、G-1・2グリッドに位置する。HT-1号掘立柱建物址と重複し、住居址西側の一部が調査区外で調査できなかった。平面形はほぼ正方形と思われ、長軸約4m短軸約3.9m、確認面からの深さ約70cmと深く遺存状態は良好で、壁は1・2号住に比べてやや鈍角に立ち上



第10図 H-1号住居址実測図

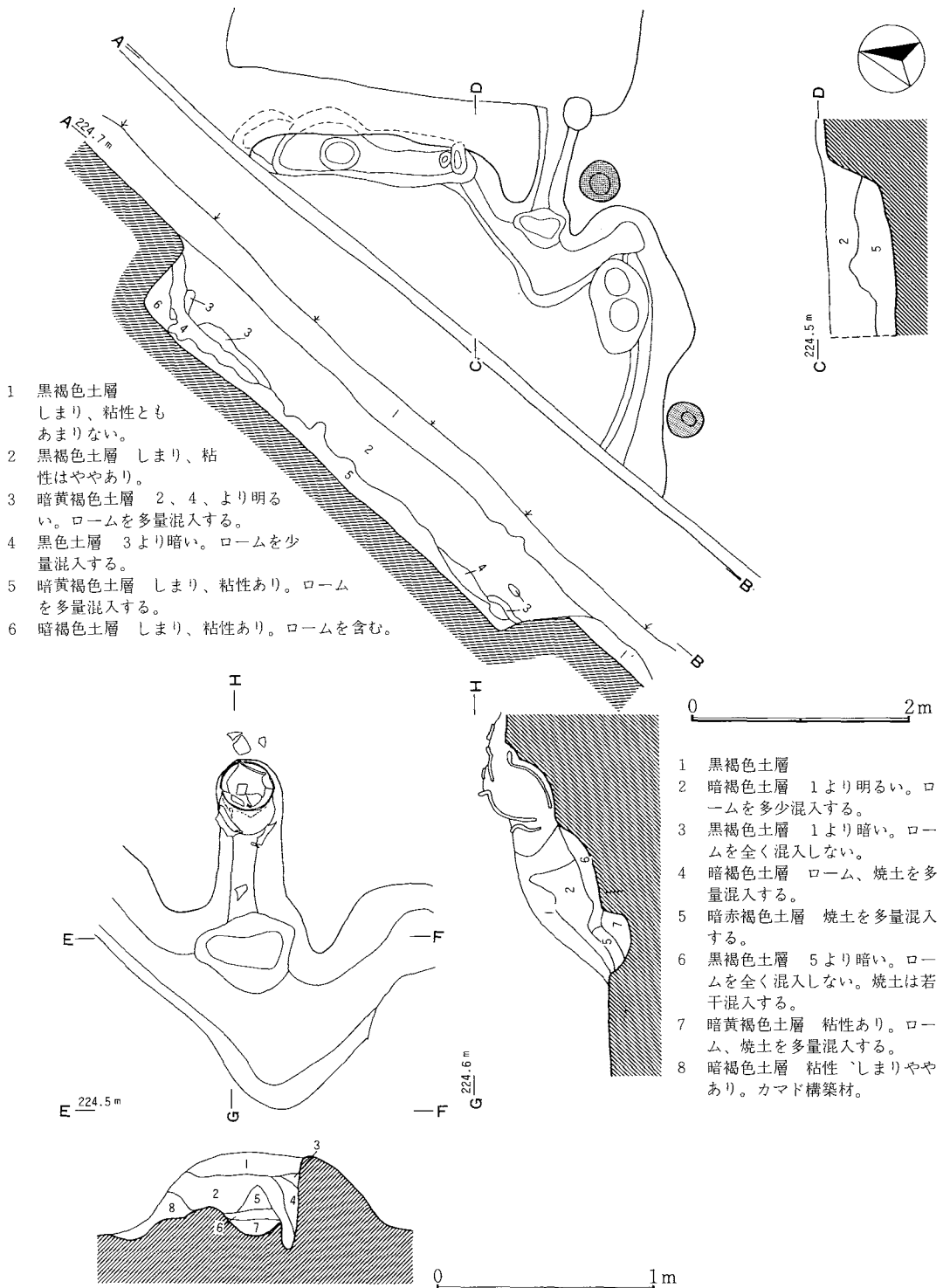
V 遺跡各説



H-1号住居址

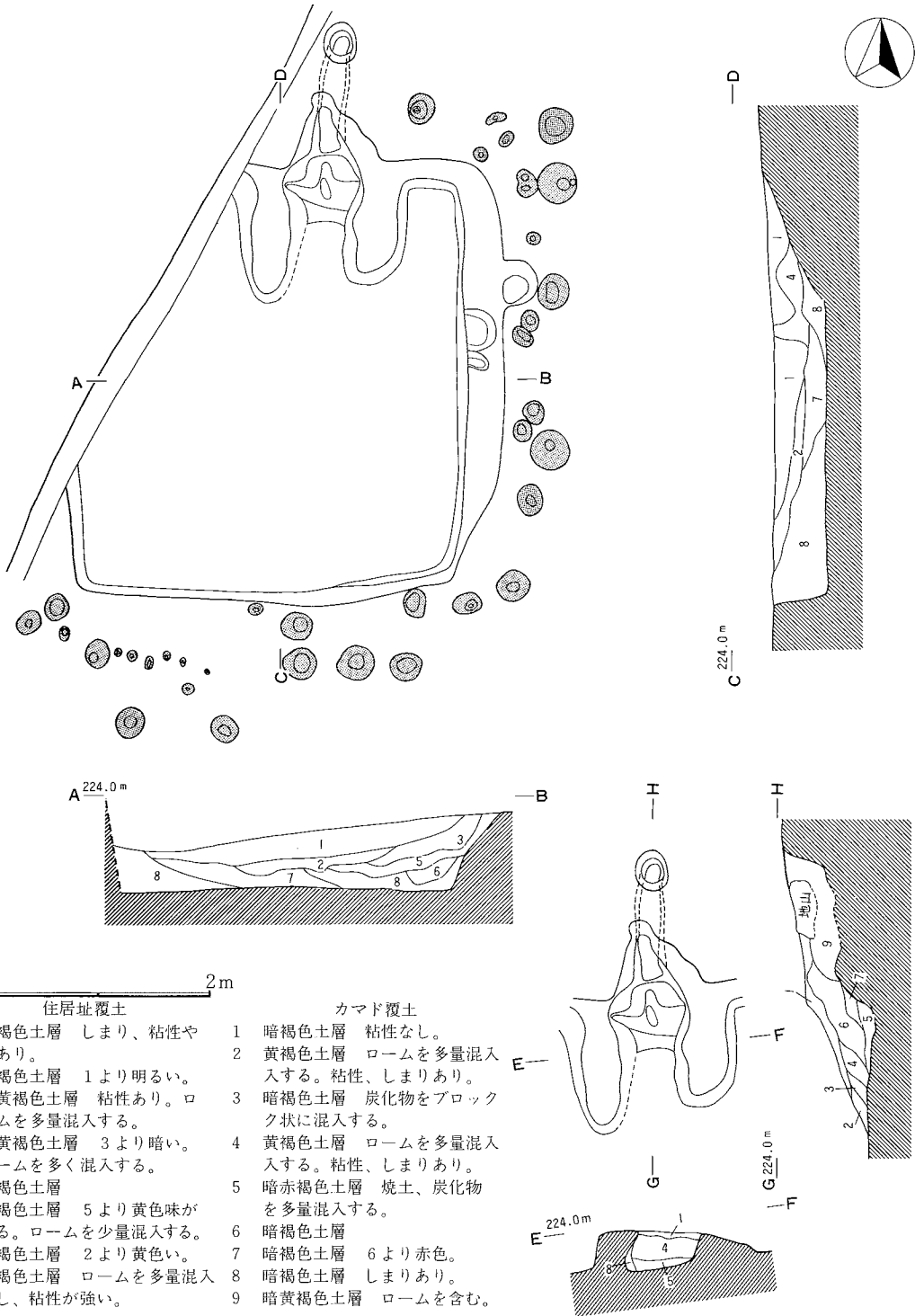
H-2号住居址

第11图 H-1号、H-2号住居址出土遺物



第12図 H-2号住居址実測図

V 遺跡各説



第13図 H-10号住居址実測図

がる。主軸方向はN-17°-Wを示す。

カマドは、住居北のやや東寄りに設けられており、袖部はローム混入の褐色土により作り付けられている。煙道は、北へ1m程延び、60cm程天井部が残っていた。

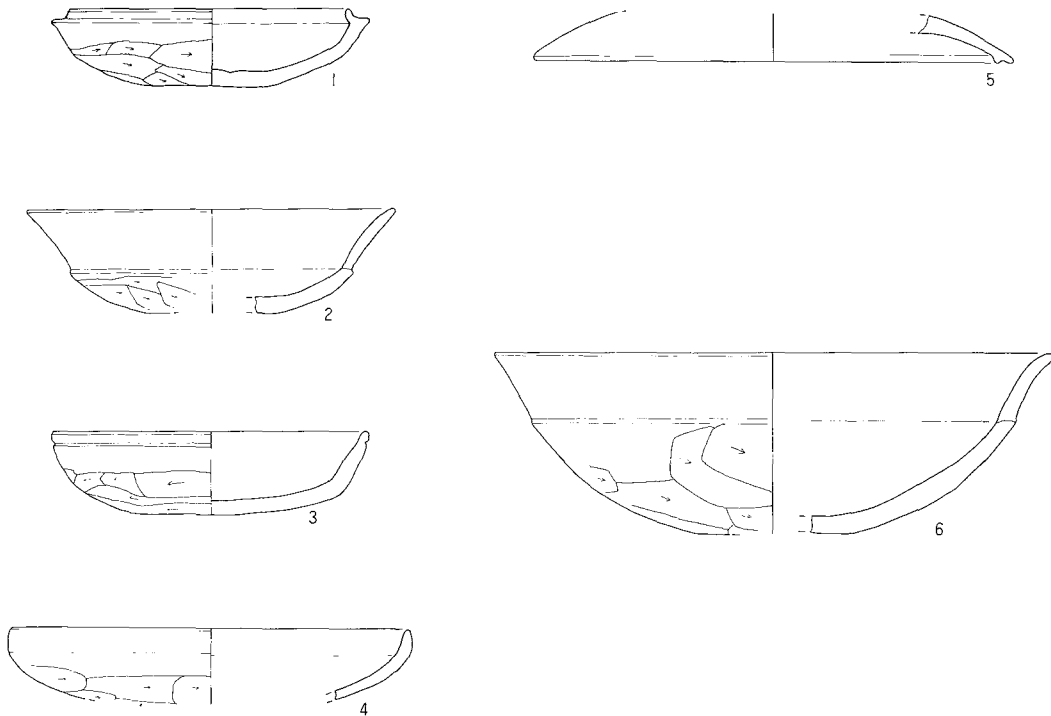
ピットは、住居址床面には確認されなかったが、1、2号住居址同様、周辺にこの住居に係わると思われるピットが多数検出された。住居址西及び南壁側を調査できなかったため、1号住居の様に對になるピットを対応させることは不可能だが、東壁に沿って並ぶピット等は上屋の支えの柱の柱穴と考えられる。この住居も、住居址の上部構造と考えて行く上で非常に良好な資料である。

遺物 坏、蓋、甕が出土した。遺存状態は良かったが、出土数は少なかった。この住居も廃棄する時点で、土器を持ち去ったものかと考えられる。

H-3号住居址（第15図）

遺構 I-3・4、J-4グリッドに位置し、大部分が調査区外であり、残りの部分もH-9号住居址により切られているため、住居址北東隅のコーナー部分のみの確認に終わった。確認面からの掘込みは約30cmで、壁は鈍角に立ち上がる。

遺物 土師器の小破片が若干検出されたのみである。



第14図 H-10号住居址出土遺物

V 遺跡各説

H-9号住居址（第15図）

遺構 I-3・4、J-3・4グリッドに位置し、3号住居址と重複し、カマドの一部と、東壁の一部が調査区外となる。平面形は長方形で、規模は長軸約4.8m、短軸約3.6m、確認面よりの深さ約70cmと深く、遺存状態は良好で、壁はやや鈍角に立ち上がり、南壁から西壁の半分程まで壁下に周溝が回る。主軸方向はN-97°-Eを示す。

カマドは、住居東側の南寄りに設けられており、袖部はローム混入の褐色土により作り付けられているが、住居内にあまり張出さない。また、火床部を囲む様に、半円形の浅い掘込みが袖部まで回る。

ピットは、住居の南端の床面に1基確認されたのみである。

また、住居址の床面上を焼土、炭化物を含む層がおおっており、火災にあったものと考えられる。

遺物 遺存状態が良く、多数出土した。坏、皿、蓋、甕・壺、その他、鉄製品の鎌、及び砥石が検出された。鎌は3点検出されたが、いずれも規格がほぼ同じで、装着部と思われる部分の形状も同一である。砥石は壁西に立てかけられた様な状況で検出された。

H-4号住居址（第18図）

遺構 H-2グリッドに位置する。この住居址はカマドの部分のみが検出され、掘込みは確認することができなかった。他の住居址と同じ面で確認していること、及び、カマド西部分に柱穴と思われるピットが2基、カマドの主軸方向と同じ方向に並ぶことなどから、平地式住居址の可能性が考えられる。

カマドは、南半分の袖部のみが検出され、ローム混入の褐色土により作られており、先端部分に石が組み込まれていた。主軸方向は約N-85°-Eを示す。

遺物 カマド付近から坏が2点出土している。

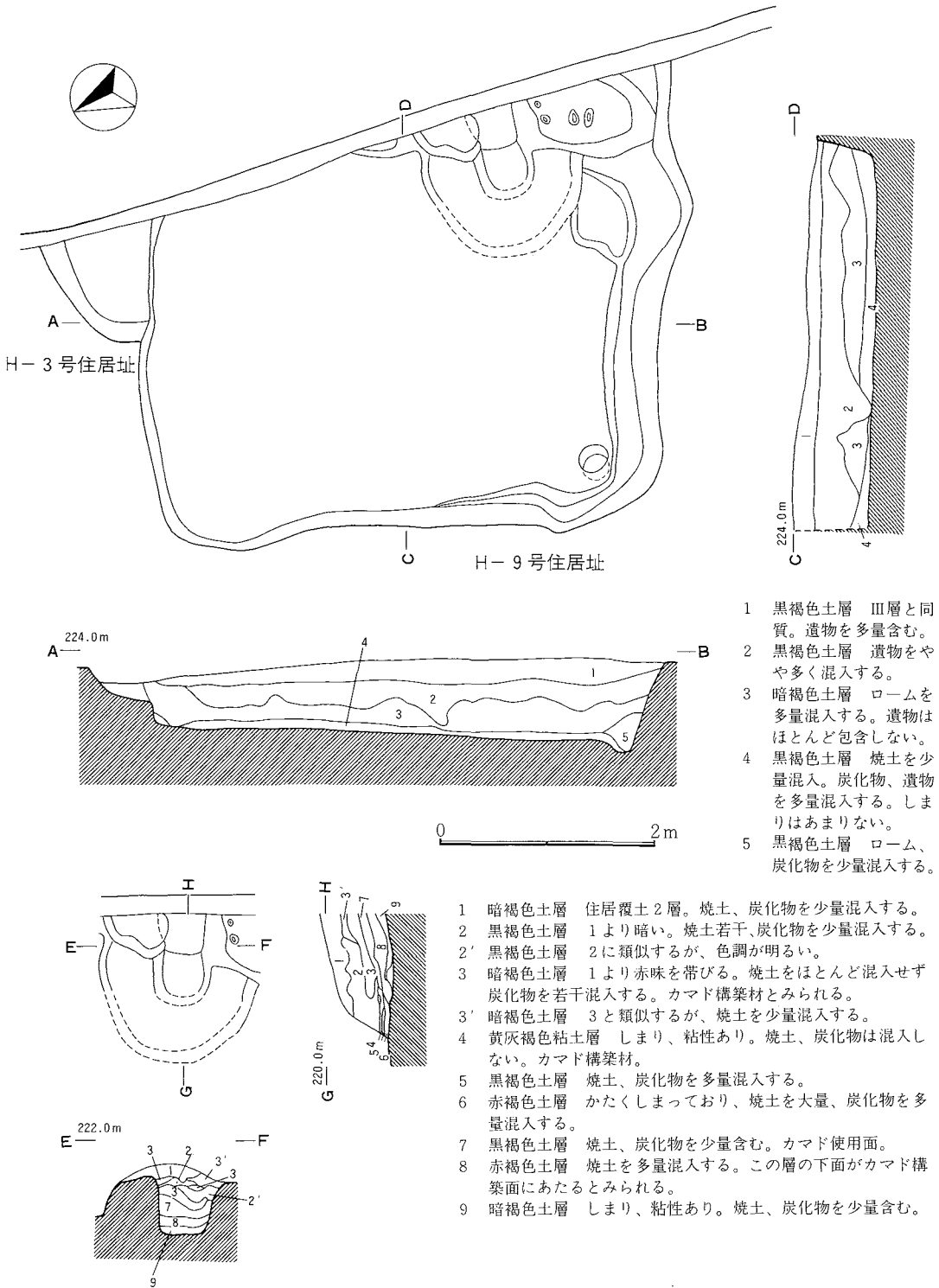
H-5号住居址（第19図）

遺構 M-4・5、N-4グリッドに位置し、一部H-6号住と重複する。住居址西側約 $\frac{1}{2}$ 程が調査区外となる。平面形は長方形と思われ、規模は短軸約3.5m、確認面よりの深さ約55cmと深く、遺存状態は良好で、壁は鋭角に立ち上がる。壁下には周溝が回り、主軸方向はN-98°-Eを示す。住居東壁北側には、他より床面が一段高い部分があり、この部分とその周辺、及び住居壁面に小ピットが多数検出され、棚状の施設が存在した可能性がある。

カマドは住居東側の南寄りに設けられており、袖部はローム混入の褐色土により作り付けられている。

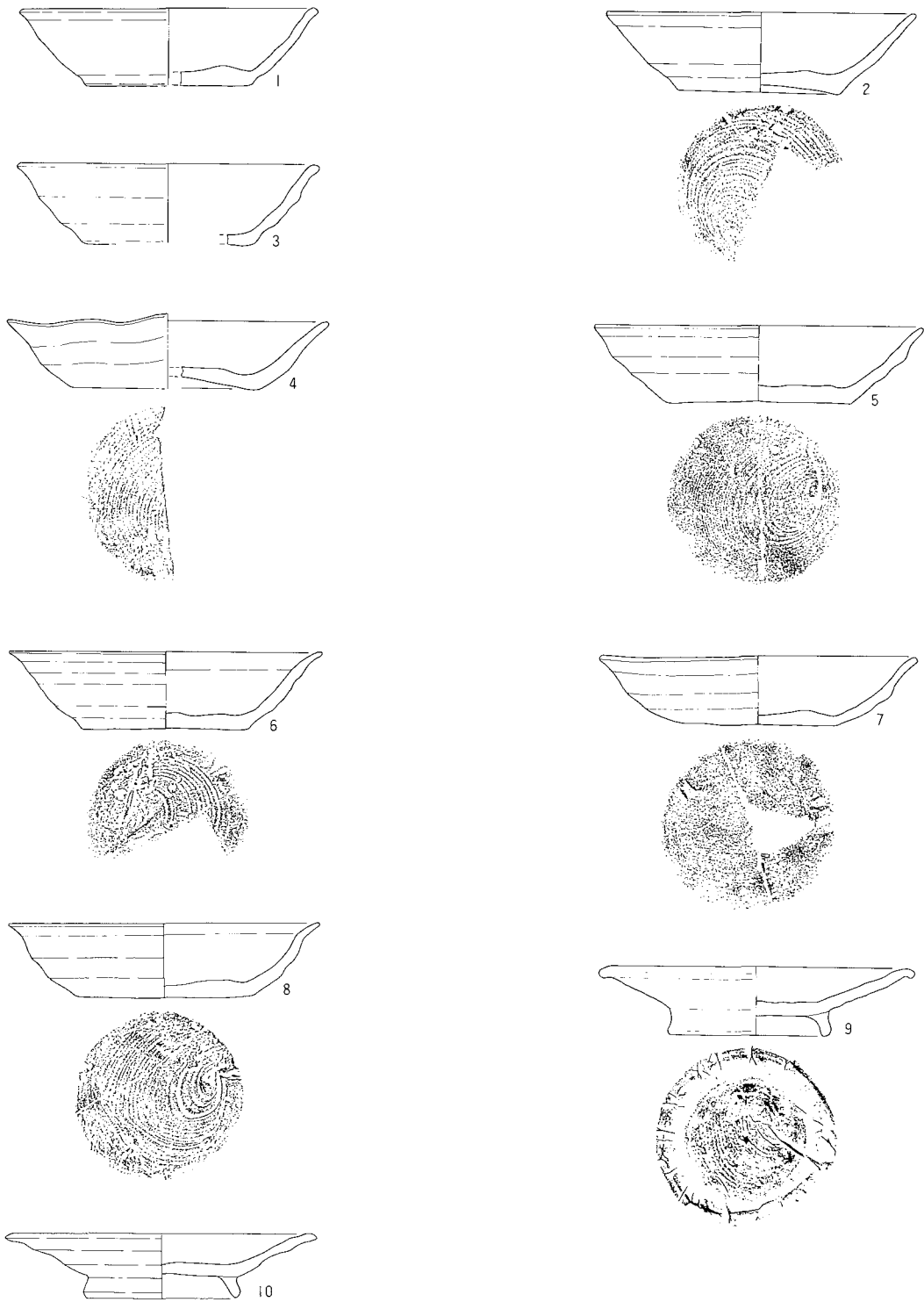
遺物 遺存状態は良好で、坏、蓋、甕が検出された。

H-6号住居址（第21図）

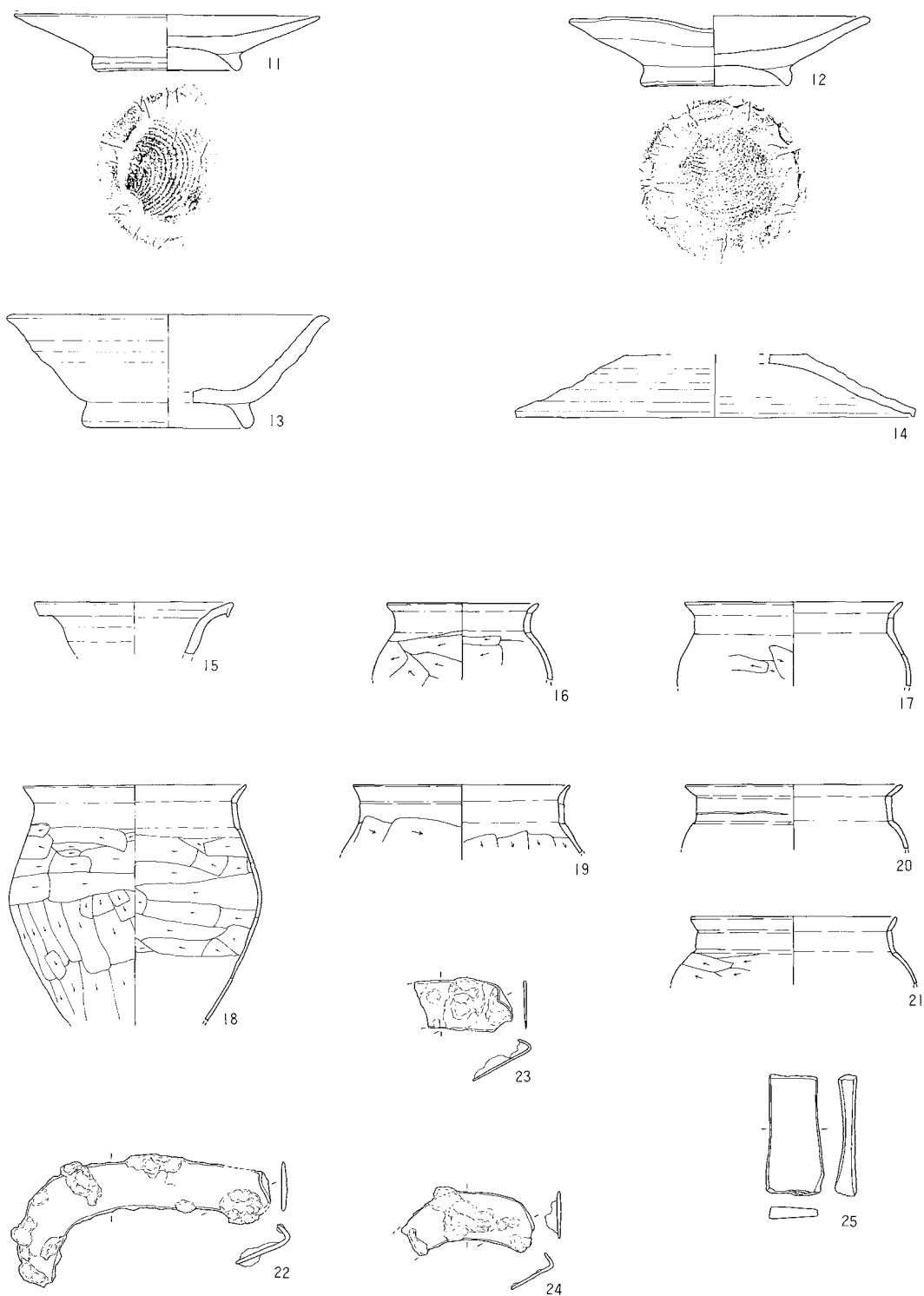


第15図 H-3号、H-9号住居址実測図

V 遺跡各説



第16図 H-9号住居址出土遺物(1)



第17图 H—9号住居址出土遺物(2)

V 遺跡各説

遺構 M-5、N-4・5・6グリッドに位置し、一部5号住と重複する。カマド煙道部分が調査区外となる。平面形は長方形で、規模は長軸約5.1m、短軸約4.2m、確認面よりの深さ約65cmと深く、壁はやや鈍角に立ち上がる。遺存状態は良好である。壁下に周溝が回り、周溝内にピットが数基検出された。主軸方向はN-93°-Eを示す。住居東壁北側には、床面及び壁面に小ピットが多数検出され、5号住同様棚状の施設が存在したものとみられる。

カマドは住居東側のほぼ中央に設けられており、袖部はローム混入の褐色土により造り付けられている。煙道は東へ延びると思われる。

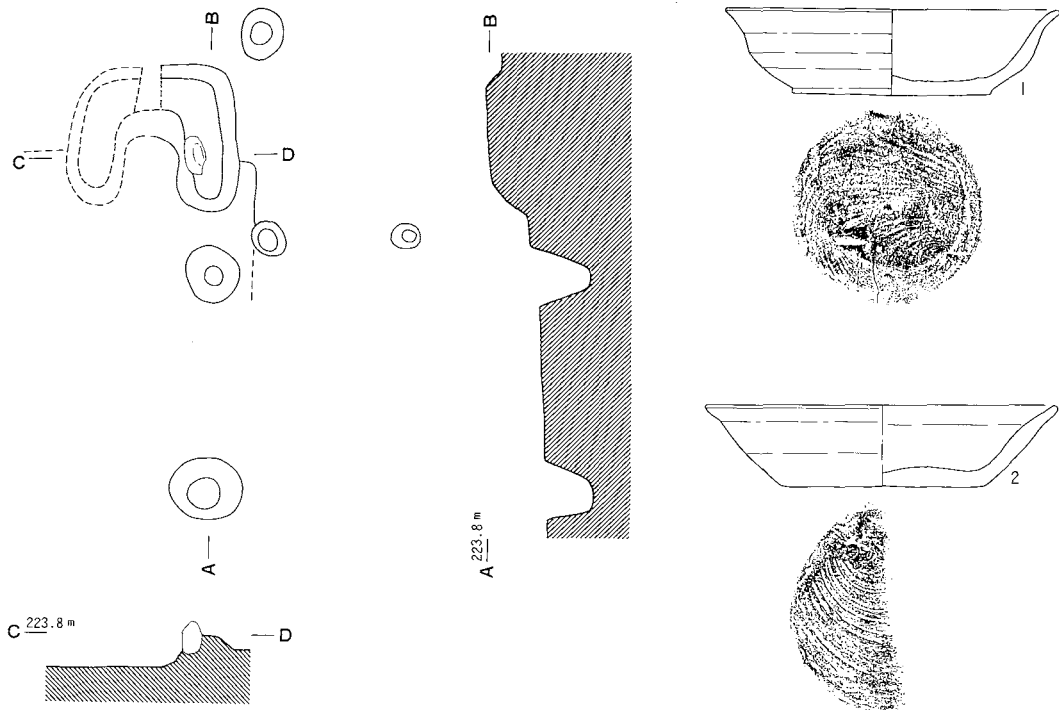
ピットは、床面に数基検出されたが、いずれも掘込みが浅く、柱穴かどうかは不明である。

遺物 遺存状態は良好で、多数検出された。坏、蓋、甕、刀子が検出された。

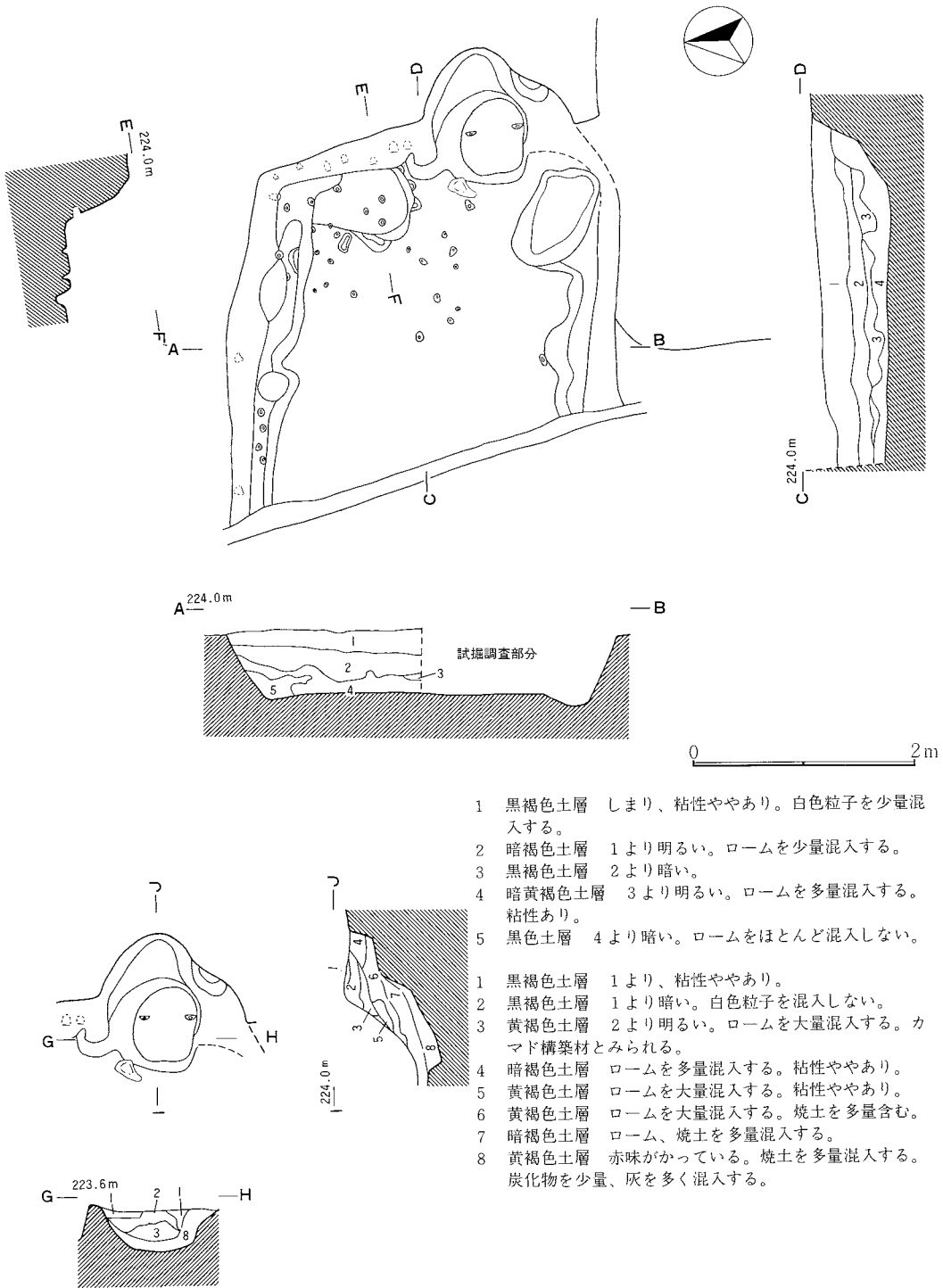
H-7号住居址（第24図）

遺構 S-11・12、T-11・12、U-11・12グリッドに位置する。H-8号住と重複し、カマド煙道の先端部分が調査区外となる。平面形は長方形で、規模は長軸約6m、短軸約5.4m、確認面よりの深さ約30cmと、他の住居址に比べて浅いが、遺存状態は良好である。壁は鋭角に立ち上がり、北壁下の一部分に周溝が回る。主軸方向はN-72°-Eを示す。

カマドは住居東側のやや南寄りに設けられており、袖部は、ローム混入の褐色土により作り付けられている。煙道は東へもう少し延びると思われる。

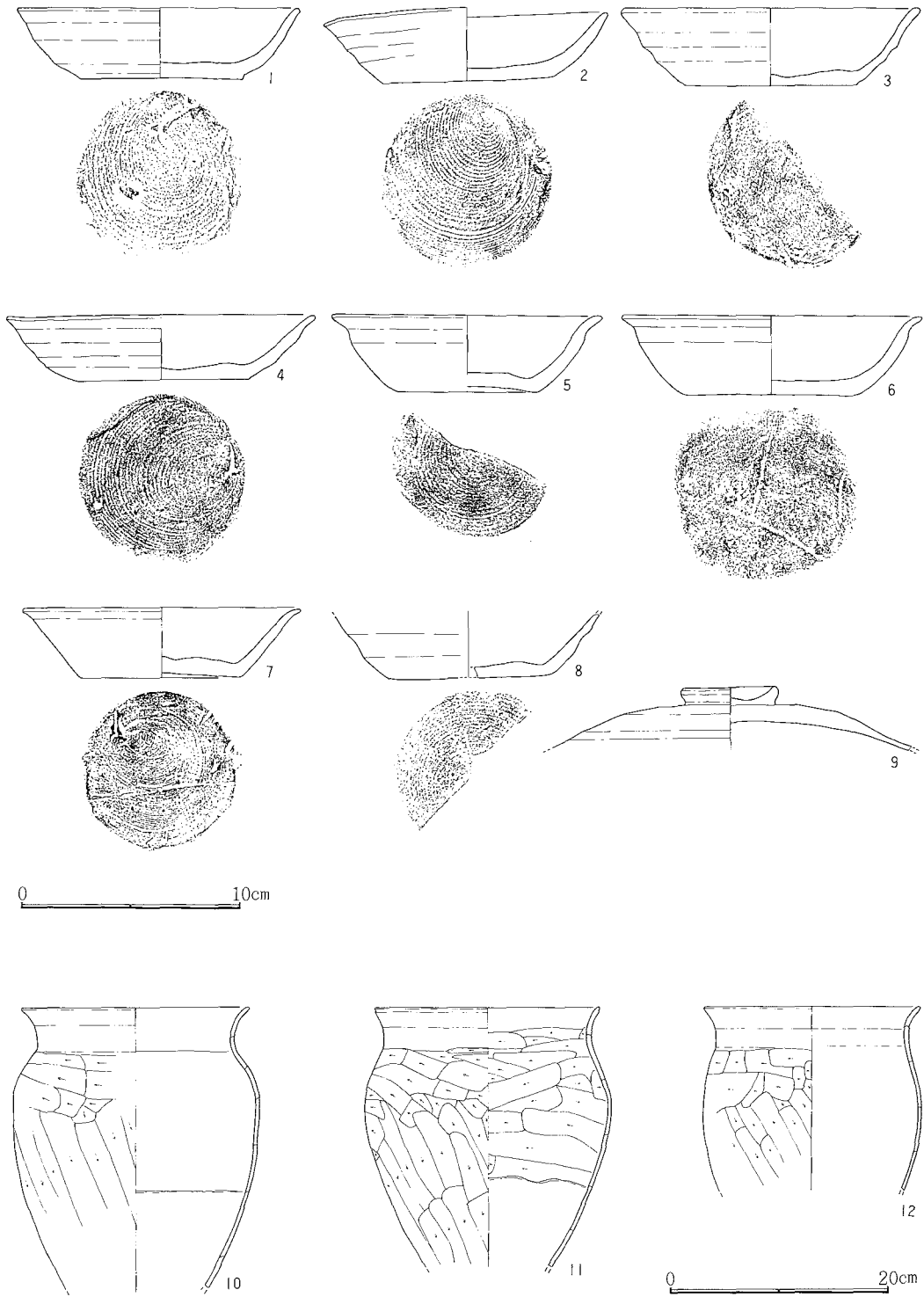


第18図 H-4号住居址と出土遺物

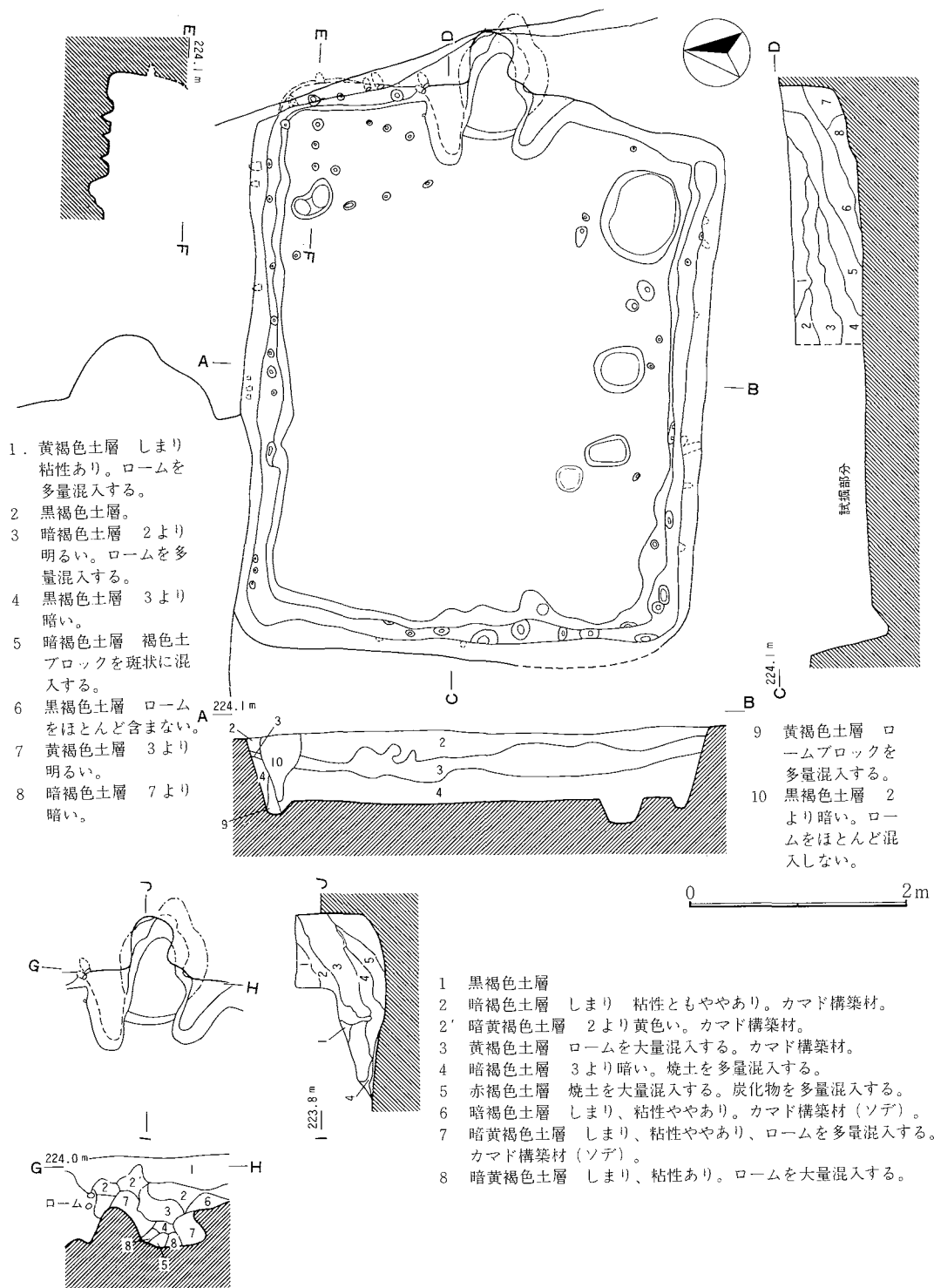


第19図 H-5号住居址実測図

V 遺跡各説

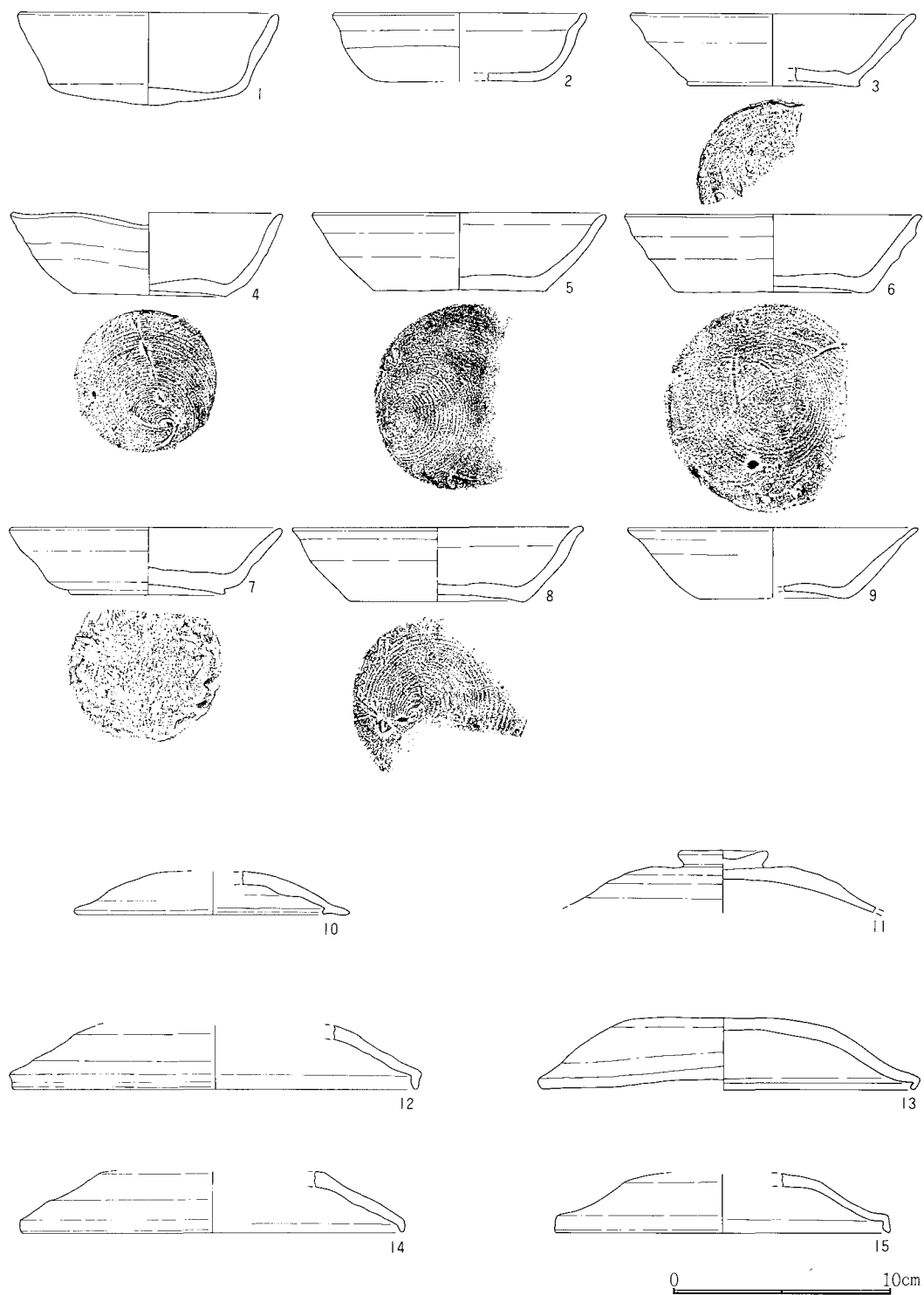


第20図 H-5号住居址出土遺物

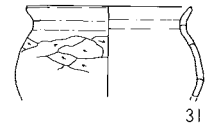
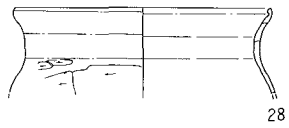
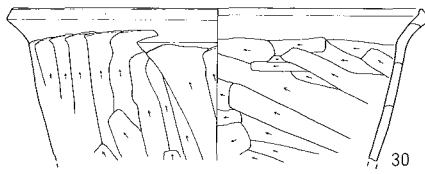
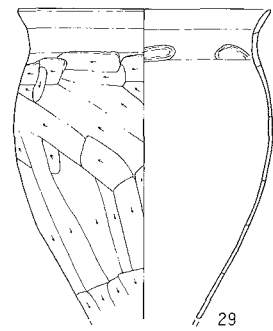
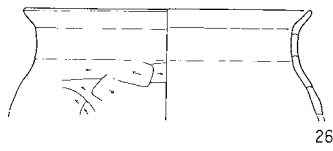
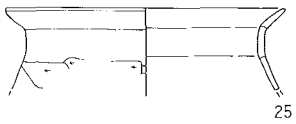
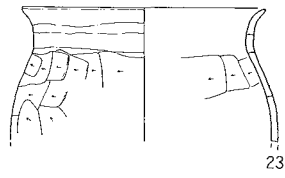
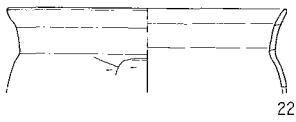
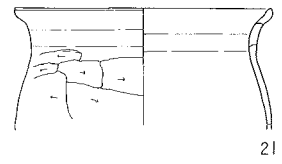
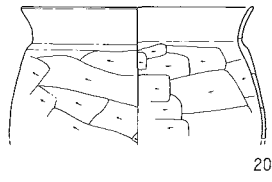
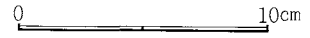
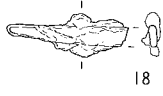
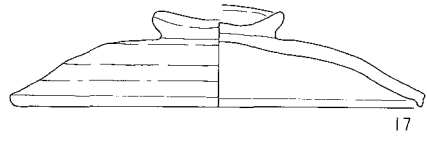


第21図 H-6号住居址実測図

V 遺跡各説

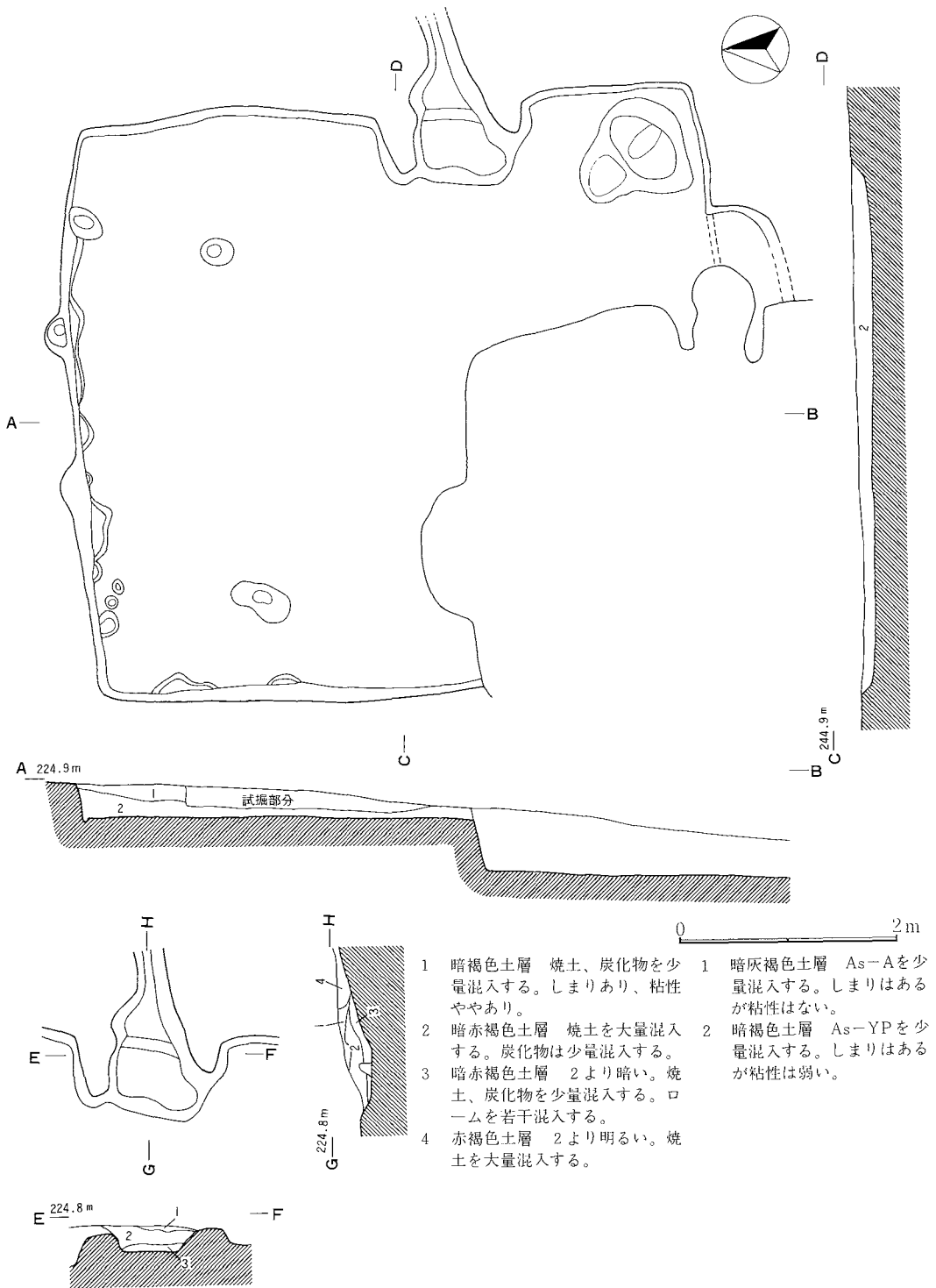


第22図 H-6号住居址出土遺物(1)

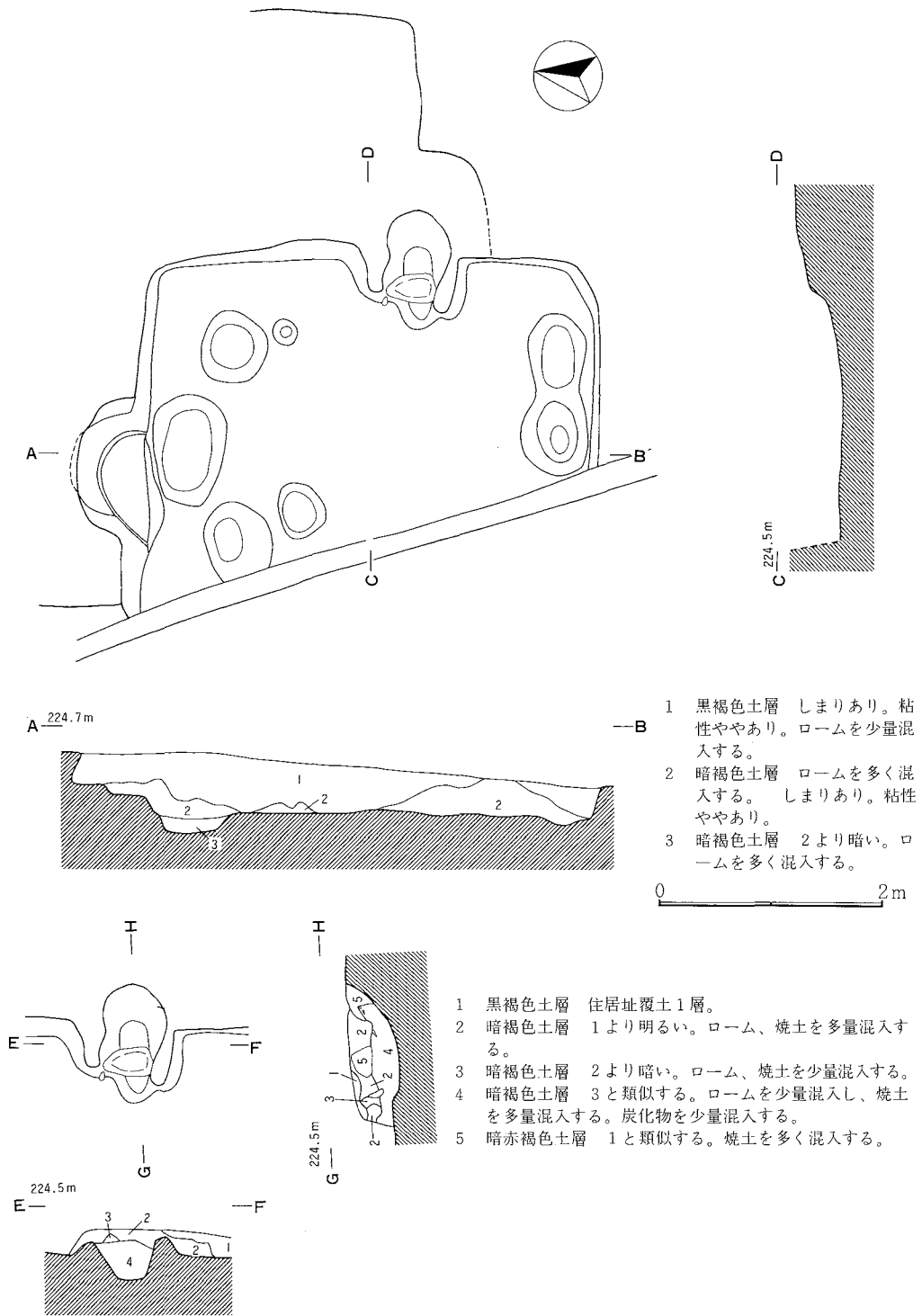


第23図 H-6号住居址出土遺物(2)

V 遺跡各説

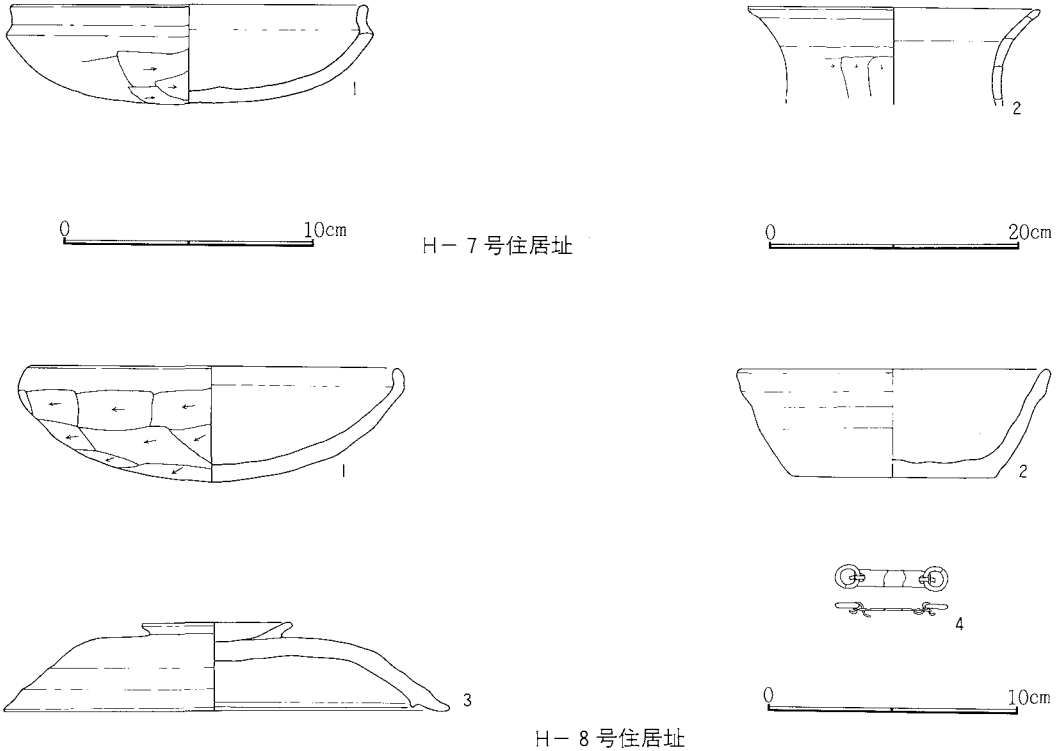


第24図 H-7号住居址実測図



第25図 H-8号住居址実測図

V 遺跡各説



第26図 H-7号、H-8号住居址出土遺物

ピットは、住居床面に3基検出され、その内2基については、配置等から支柱穴と思われる。また、北東端に、貯蔵穴と思われる土壌が検出された。

遺物 坏、甕が各1点ずつ検出された。

H-8号住居址 (第25図)

遺構 T-11・12、U-11・12グリッドに位置する。7号住と重複し、住居西側約 $\frac{1}{2}$ が調査区外となる。規模は南北約4.1m、確認面よりの深さ約40cmと深く、遺存状態は良好である。主軸方向はN-66°-Eを示す。住居北壁には、半円形の袋状の掘込みがある。

カマドは住居東側のやや南寄りに設けられており、袖部は、ローム混入の褐色土により作り付けられている。また、袖の上部には石がかけられていた。

ピット、土壌は住居床面に数基検出されたが、貯蔵穴と思われる土壌は確認できず、柱穴と思われるピットも明確には確認できなかった。

遺物 遺存状態は良好で、坏、蓋が検出された。また、カマドの袖の先端部分から青銅製の金具が検出された。

b 掘立柱建物址

HT-1号掘立柱建物址 (第27図)

F-2・3、G-2・3、H-2グリッドに位置し、H-10号住と重複する。このH-10号住居址を埋め立てて作られている。棟方向は南北で方向はN-8°-Eを示す。構造は桁行2間、梁行2間、総柱の建物であり、歪を持つ。規模は桁行東辺4.8m、西辺5.3m、梁行北辺3.6m、南辺3.8m、面積は約18.7m²である。柱間はほぼ等間であり、柱穴はほぼ円形か楕円形で、規模も大きくしっかりとした柱穴である。

遺物 何も出土しなかった。

HT-2号掘立柱建物址 (第28図)

F-2・3グリッドに位置する。棟方向は南北で、方向はN-9°-Wを示す。構造は桁行2間梁行1間で歪を持つ。規模は桁行東辺3.2m、西辺2.9m、梁行北辺2.7m、南辺2.8m、面積は約8.4m²である。柱間はほぼ等間であり、柱穴はほぼ円形か楕円形で、掘込みはしっかりとした柱穴が多い。

遺物 何も出土しなかった。

HT-3号掘立柱建物址 (第28図)

F-3、G-3グリッドに位置し、HT-4号掘立と重複する。棟方向は南北で、方向はN-11°-Wを示す。構造は桁行1間、梁行1間で歪を持つ。規模は桁行東辺2m、西辺2.5m、梁行北辺1.6m、南辺1.6m、面積は約3.6m²である。柱穴は円形あるいは不正円形で、掘込みはしっかりとした柱穴が多い。

遺物 何も出土しなかった。

HT-4号掘立柱建物址 (第29図)

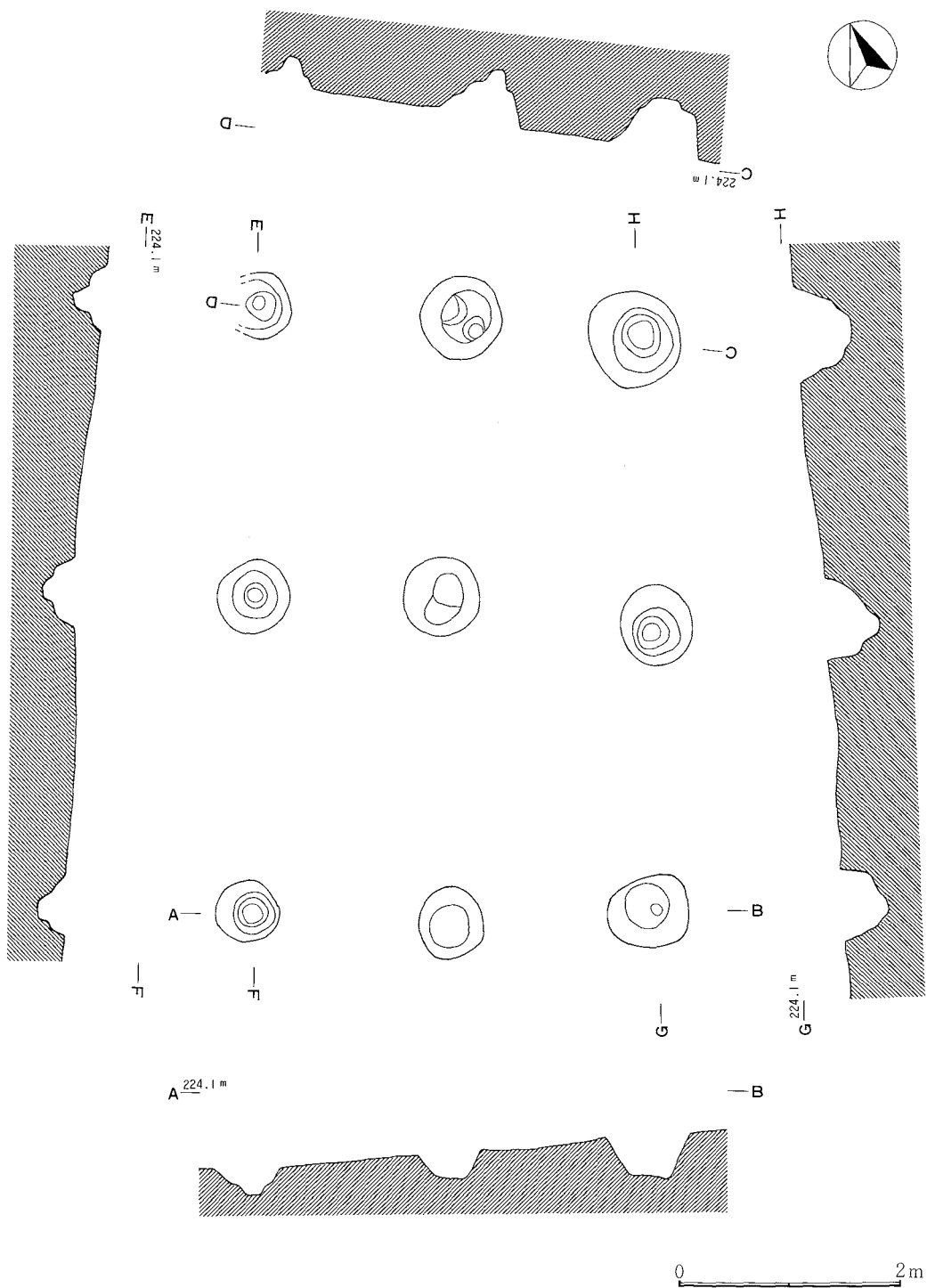
F-3、G-3グリッドに位置し、HT-3号掘立と重複する。棟方向は南北で、方向はN-19°-Wを示す。構造は桁行1間、梁行1間で歪を持つ。規模は桁行東辺1.9m、西辺2m、梁行北辺1.5m、南辺1.5m、面積は約2.9m²である。柱穴はほぼ円形で、掘込みはしっかりとした柱穴が多い。

遺物 何も出土しなかった。

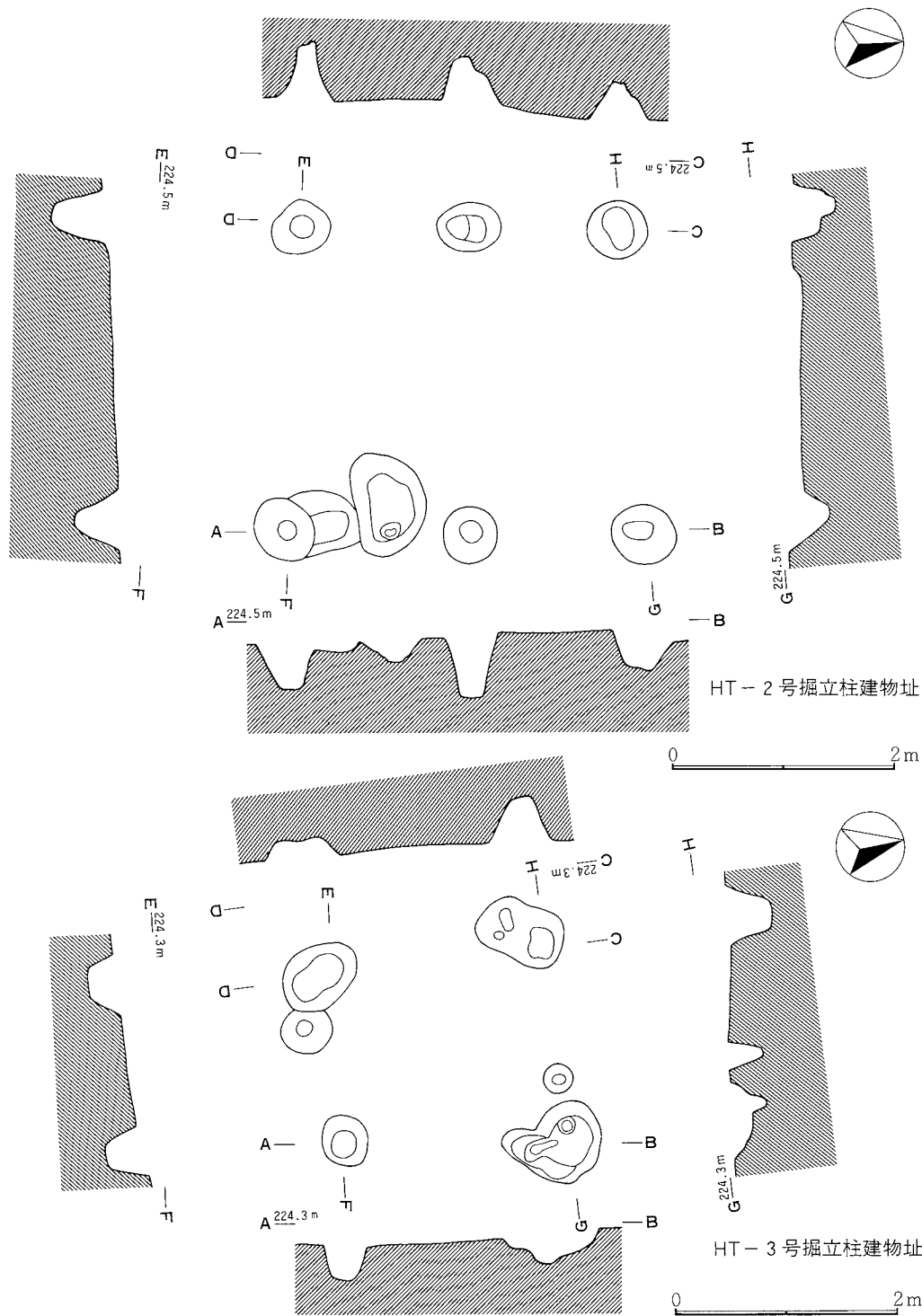
c 溝

M-1号溝 (第32図)

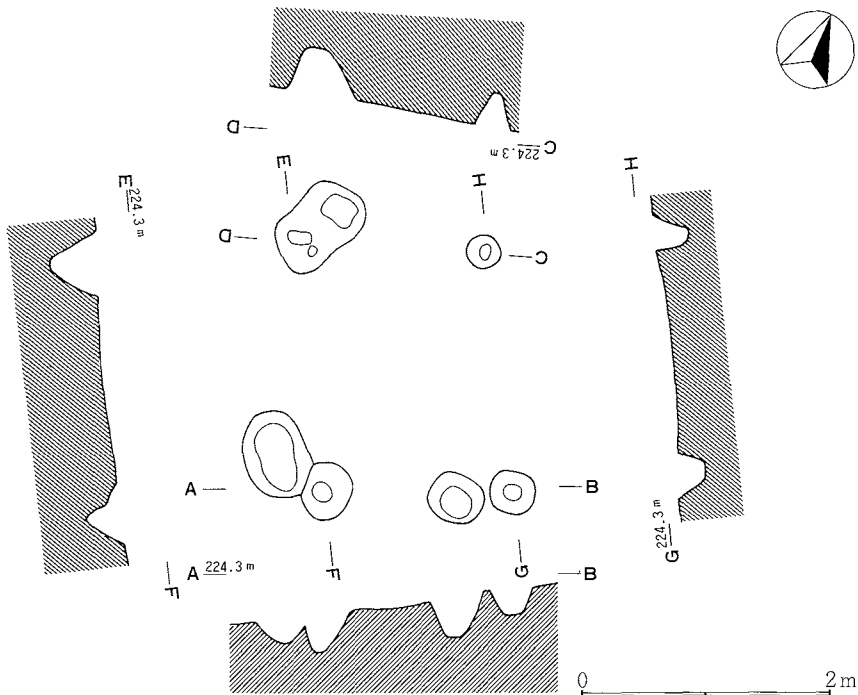
E-1・2・3、F-1・2グリッドに位置し、東西方向に走る。走向はN-86°-Eを示す。規模は上端幅1.35m~1.6m、下端幅0.35m~0.55m、深さ0.7m~1mである。断面形は箱薬研状



第27図 HT-1号掘立柱建物址実測図



第28图 HT-2号、HT-3号掘立柱建物址实测图

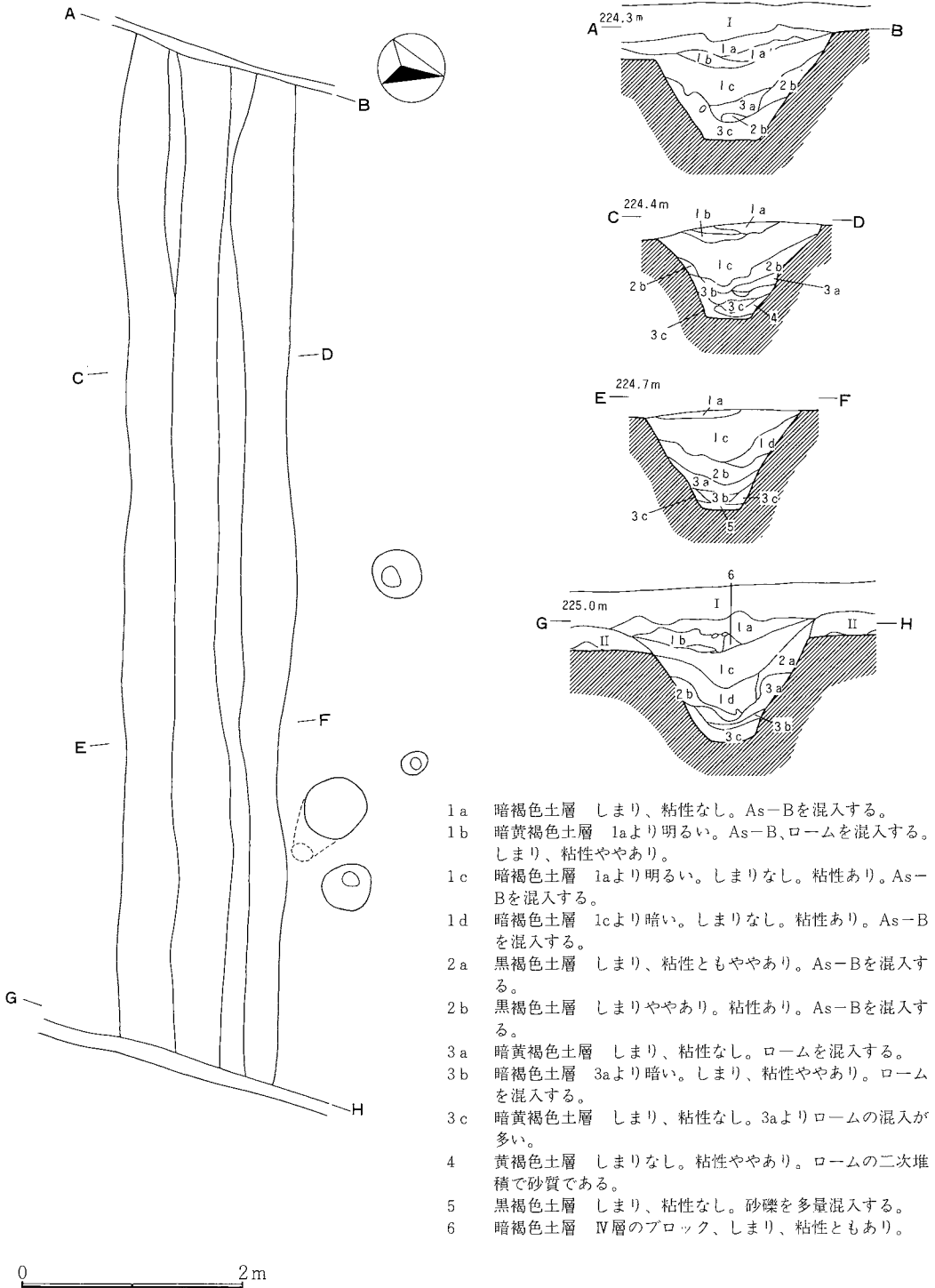


第29図 HT-4号掘立柱建物址実測図

をなす。溝の覆土上層には人為的に南側から土が入られている(1 a~1 d層)。また、中層以下は自然堆積とみられる。溝の北側にはこの溝に係ると思われるピットが数基検出され、溝を渡るための何らかの施設が存在した可能性が考えられる。また、概要でも述べたように、掘立柱建物址が、この溝の南側にまとまって検出されており、何らかの関連性が考えられる。いずれにせよ、溝の中から平安時代に属すると思われる土器片、破口等が出土していることから、平安時代の集落を区画するという意味を持つ溝と考えられる。

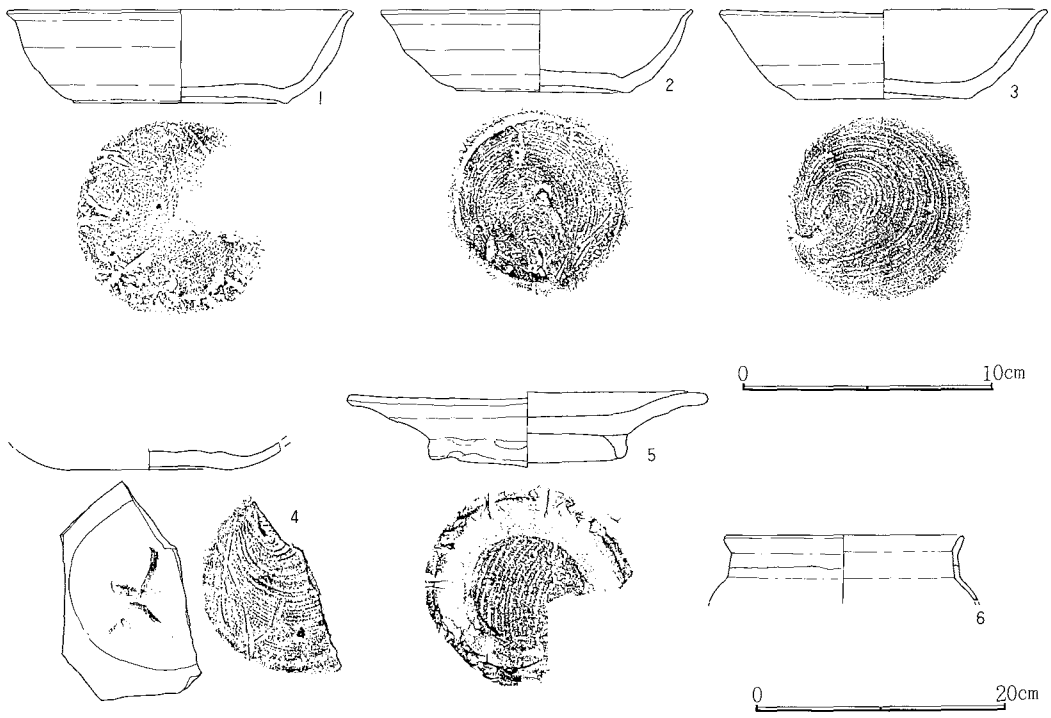
d グリッド出土の遺物 (第31図)

1~6は遺構外出土の遺物で、グリッドにより取り上げた。1は、O-6・Cグリッドの遺構確認面からの出土で、H-6号住居址との関連性が考えられる。2、3は、出土地点不明だが、遺構確認面からの出土である。4は、J-2・Bグリッドの遺構確認面からの出土で、「太」の墨書が底面に書かれている。H-9号住居址との関連性が考えられる。5、6は、K-4グリッドの調査区外の採集である。



第30図 M-1号溝実測図

V 遺跡各説



第31図 グリッド出土遺物

No.	器種	法量	調整技法	胎土	色調	残存	備考
1	土師器 坏	器高 3.8 口径12.2	外面：口縁部横ナデ、底部ヘラケズリ。 内面：横ナデ。	細砂粒を含むが緻密	赤褐色	¼	口縁部にスス附着
2	盤	器高 3.5 口径20 底径 8.5	外面：口縁部横ナデ、底部ヘラケズリ。 内面：横ナデ。	〃	〃	½	
3	須恵器 坏	器高 4.5 口径 1.5 底径11.5	内外面共に回転横ナデ。	緻密	灰白色	¼	
4	土師器 長胴甕	器高 6.4 口径26.3	外面：口縁部横ナデ、胴上部縦方向ヘラケズリ。 内面：口縁部横ナデ、胴上部ヘラナデ。	細砂粒を多く含む	赤褐色	口縁～胴上部 ¼	口縁部にスス附着
5	長胴甕	器高19	外面：胴部縦方向ヘラケズリ。 内面：横方向ヘラケズリ。	細砂粒が多くやや粗雑	〃	胴上部～胴下部 ⅓	
6	長胴甕	器高23 口径22.4	外面：口縁部横ナデ、胴部不定方向ヘラケズリ。 内面：口縁部横ナデ、胴部横方向ヘラケズリ。	細砂粒多く含む	〃	口縁～胴部 ¼	

第1表 H-1号住居址出土遺物観察表

No.	器種	法量	調整技法	胎土	色調	残存	備考
1	土師器 坏	器高 3.6 口径13.6 底径 5.5	外面：口縁部横ナデ、体底部ヘラケズリ。 内面：横ナデ。	細砂粒を含む	赤褐色	¼	磨滅がいちじるしい
2	土師器 坏	器高 4.8 口径12	外面：口縁部横ナデ、体底部ヘラケズリ。 内面：横ナデ。	細砂粒を少量含む	〃	完形	外面にスス附着
3	土師器 坏	器高 3.5 口径12.4	外面：口縁部横ナデ、体底部ヘラケズリ。 内面：横ナデ。	〃	〃	¼	
4	土師器 長胴甕	器高 9 口径25	外面：内面共に口縁部横ナデ、胴部ヘラケズリ。	〃	〃	口縁～胴上部 ½	
5	長胴甕	器高15.9 口径21.6	外面：口縁部横ナデ、胴部縦方向ヘラケズリ。 内面：口縁部横ナデ、胴部横方向ヘラケズリ。	〃	〃	口～胴上部 ¼	
6	長胴甕	器高14.5 口径21.7	外面：口縁部横ナデ、胴部不定方向ヘラケズリ。 内面：口縁部横ナデ、胴部横方向ヘラケズリ。	〃	〃	口縁～胴下部 ⅓	
7	長胴甕	器高14.5 口径21.7	外面：口縁部横ナデ、胴上部横、胴下部縦方向ヘラケズリ。 内面：ナデ。	細砂粒を含む	〃	口縁～胴下部 ⅓	

第2表 H-2号住居址出土遺物観察表

V 遺跡各説

No.	器種	法 量	調 整 技 法	胎 土	色 調	残 存	備 考
1	須恵器 坏	器高 3.5 口径13.7 底径 7.6	内外面共に回転横ナデ	緻密	灰色	½	外面にスス付着
2	〃	器高 3.6 口径14.1 底径 7.2	内外面共に回転横ナデ、底部回転糸切り	〃	灰白色	½	
3	〃	器高 3.6 口径14.8 底径 7.3	内外面共に回転横ナデ、底部回転糸切り	〃	〃	¼	
4	〃	器高 3.4 口径14.7 底径 8.2	内外面共に回転横ナデ、底部回転糸切り	〃	〃	½	口縁部が歪む
5	〃	器高 3.4 口径14.9 底径 8.3	内外面共に回転横ナデ、底部回転糸切り	〃	〃	¼	口縁部にスス付着
6	〃	器高 3.5 口径14.1 底径 7.5	内外面共に回転横ナデ、底部回転糸切り	〃	青灰色	½	外面にスス付着
7	〃	器高 3.1 口径14.5 底径 7	内外面共に回転横ナデ、底部回転糸切り	細砂粒を少量含むが緻密	灰褐色	¾	外面にスス付着
8	〃	器高 3.4 口径14.1 底径 8	内外面共に回転横ナデ、底部回転糸切り	〃	灰白色	ほぼ完形	〃
9	皿	器高 3.3 口径14.4 底径 7.1	内外面共に回転横ナデ、底部回転糸切り、後付高台	緻密	青灰色	¾	
10	〃	器高 2.9 口径14.2 底径 6.7	内外面共に回転横ナデ、底部回転糸切り、後付高台	〃	〃	〃	
11	〃	器高 2.6 口径14.1 底径 6.3	内外面共に回転横ナデ、底部回転糸切り、後付高台	緻密	灰白色	½	
12	〃	器高 3.2 口径13.8 底径 6.5	内外面共に回転横ナデ、底部回転糸切り、後付高台	細砂粒を少量含む	黒灰色	¾	内外面に黒色 口縁部が歪む
13	高台付 壺	器高 5.2 口径14.8 底径 7.4	内外面共に回転横ナデ、底部回転糸切り、後付高台	〃	灰色	¾	

第3表 H-9号住居址出土遺物観察表(1)

No.	器種	法量	調整技法	胎土	色調	残存	備考
14	須恵器 蓋	器高 3 底径18.2	内外面共に回転横ナデ	緻密	青灰色	¼	
15	壺	器高 4.8 口径18.4	口頸部は外反し、口唇部は頸を出す。内外面共に回転横ナデ	〃	灰色	口縁部～頸部 ⅓	
16	土師器 甕	器高 7.1 口径13.7	外面：口縁部横ナデ、胴部横方向ヘラケズリ。 内面：口縁部横ナデ、胴部横方向ヘラケズリ。	細砂粒を少量含む	赤褐色	口縁部～胴部 ½	
17	〃	器高 7.9 口径19.8	外面：口縁部横ナデ、胴上部横胴下部縦方向ヘラケズリ。 内面：口縁部横ナデ、胴部横方向ヘラケズリ。				
18	〃	器高21.5 口径20.4	外面：口縁部横ナデ、胴上部横胴下部縦方向ヘラケズリ。 内面：口縁部横ナデ、胴部横方向ヘラケズリ。	細砂粒を少量含む	赤褐色	口縁部～胴下部 ⅓	胴部にスス付着
19	〃	器高 6.2 口径19.8	外面：口縁部横ナデ、胴部横方向ヘラケズリ。 内面：口縁部横ナデ。	〃	〃	口縁部～頸部 ¼	
20	〃	器高 5.9 口径19.9	外面：口縁部横ナデ、胴部ヘラケズリ。 内面：横ナデ。	〃	〃	口縁部～頸部 ¼	
21	〃	器高 5.9 口径18.3	外面：口縁部横ナデ、胴部横方向ヘラケズリ。 内面：横ナデ。	細砂粒を含む	〃	口縁部～胴上部 ¼	口縁部にスス付着
22	鎌	現在長 23.4 幅 4.4 厚さ 6	鉄製先端が折損して、装着部と思われる部分が折反されている。形状、断面内側して刃部がみられることより鎌と思われる。			完形	
23	〃	現在長9 幅 4.5 厚さ 4	鉄製、先端を折損、22と形、特長はほぼ同じ。			¼	
24	〃	現在長 12.2 幅 4.5 厚さ 4	鉄製、先端を折損、22と形、特長はほぼ同じ。			⅓	
25	砥石	現在長 11.2 幅 5.3 厚さ 2	平面側面共使用されており滑らかな面を呈する。			完形	

第4表 H-9号住居址出土遺物観察表(2)

V 遺跡各説

No.	器種	法 量	調 整 技 法	胎 土	色 調	残 存	備 考
1	土師器 坏	器高 3 口径11 底部 4.5	外面：口縁部横ナデ。体底部口縁部横ナデ。 内面：横ナデ。	細砂粒を少 量含む	赤褐色	完形	
2	〃	器高 4.7 口径14.7 底径 5	外面：口縁部横ナデ、底部ヘラケズリ。 内面：横ナデ。	〃	〃	1/4	
3	〃	器高 3.3 口径12.5 底径 6.5	外面：口縁部横ナデ、底部ヘラケズリ。 内面：横ナデ。	〃	褐色	2/3	口縁下に一条 沈線がまわ る。底部スス
4	〃	器高28 口径15.7	外面：口縁部横ナデ、底部ヘラケズリ。 内面：横ナデ。	細砂粒を含 む	赤	1/4	
5	須恵器 甕	口径19	内外面共に回転横ナデ	緻密	灰白色	1/3	
6	盤	器高 7.2 口径22.4 底径 5.5	外面：口縁部横ナデ、体底部ヘラケズリ。 内面：横ナデ。	細砂粒を少 量含む	褐	1/3	口縁部にスス 付着

第5表 H-10号住居出土遺物観察表

No.	器種	法 量	調 整 技 法	胎 土	色 調	残 存	備 考
1	土師器 坏	器高 3.5 口径13 底径 7.5	内外面共に横ナデ、底部回転糸切り	細砂線を少 量含む	灰色	2/3	外面にスス付 着
2	〃	器高 3.5 口径13.9 底径 4.3	内外面共に横ナデ、底部回転糸切り	細砂線を少 量含む	灰色	1/3	外面にスス付 着

第6表 H-4号住居出土遺物観察表

No.	器種	法量	調整技法	胎土	色調	残存	備考
1	須恵器 坏	器高 3.9 口径 13 底径 8	内外面共に回転横ナデ、底部回転糸切り	緻密	灰褐色	$\frac{1}{6}$	外面にスス付着
2	〃	器高 3.3 口径12.9 底径 7.7	内外面共に回転横ナデ、底部回転糸切り	〃	灰色	$\frac{1}{6}$	
3	〃	器高 3.5 口径13.4 底径 7.8	内外面共に回転横ナデ、底部回転糸切り	細砂粒を少量含む	灰白色	$\frac{1}{2}$	外面にスス付着
4	〃	器高 3 口径 14 底径 7.7	内外面共に回転横ナデ、底部回転糸切り	〃	〃	$\frac{1}{2}$	〃
5	〃	器高 3.2 口径 12 底径 6.3	内外面共に回転横ナデ、底部回転糸切り	緻密	青灰色	$\frac{1}{3}$	〃
6	〃	器高 3.5 口径13.5 底径 8	内外面共に回転横ナデ、底部回転糸切り	細砂粒を少量含む	灰白色	$\frac{1}{3}$	〃
7	〃	器高 2.9 口径12.5 底径 7	内外面共に回転横ナデ、底部回転糸切り	緻密	灰褐色	ほぼ完形	外面に自然釉がかかる
8	〃	器高 2.8 底径 17	内外面共に回転横ナデ、底部回転糸切り	細砂粒を含む	灰白色	$\frac{1}{3}$	
9	須恵器 蓋	器高 2.6 底径 4.2 撮径 4.2	内外面共に回転横ナデ	細砂粒を少量含む	〃	$\frac{1}{2}$	
10	土師器 甕	器高24.1 口径 20	外面：口縁部横ナデ、胴上部横方向、胴下部縦方向ヘラケズリ。 内面：横ナデ。	細砂粒を少量含む	赤褐色	口縁部～胴下部 $\frac{1}{3}$	頸部にスス付着
11	〃	器高23.3 口径20.3	外面：口縁部横ナデ、胴上部横方向、胴下部縦方向ヘラケズリ。 内面：口縁部横ナデ、胴部横方向ヘラケズリ。	〃	〃	口縁部～胴下部 $\frac{1}{3}$	頸部～胴部にかけてスス付着
12	〃	器高16.5 口径19.4	外面：口縁部横ナデ、胴上部横方向、胴下部縦方向口縁部横ナデ。 内面：横ナデ。	〃	〃	口縁部～胴下部 $\frac{1}{3}$	

第7表 H-5号住居址出土遺物観察表

V 遺跡各説

No.	器種	法量	調整技法	胎土	色調	残存	備考
1	土師器 坏	器高 4.2 口径11.8 底径 3.2	磨滅が著しい観察不能	砂粒を多く 含む	赤褐色	ほぼ完形	
2	〃	器高 3.2 口径11.6 底径 7	外面：口縁部横ナデ、底部ヘラケズリ。 内面：横ナデ。	細砂粒を少 量含む	〃	1/2	
3	須恵器 坏	器高 3.4 口径13.1 底径 7.9	内外面共に回転横ナデ、底部回転糸切り	緻密	青灰色	1/2	
4	〃	器高 3.7 口径12.4 底部 7	内外面共に回転横ナデ、底部回転糸切り	〃	〃	完形	口縁部が歪む
5	〃	器高 3.5 口径13.4 底部 7.8	内外面共に回転横ナデ、底部回転糸切り	〃	灰褐色	1/2	外面にスス付 着
6	〃	器高 3.6 口径13.6 底径 8.7	内外面共に回転横ナデ、底部回転糸切り	〃	〃	1/2	
7	〃	器高 3 口径12.4 底径 7	内外面共に回転横ナデ、底部回転糸切り	〃	〃	3/8	歪をもつ
8	〃	器高 3.4 口径13.4 底径 8	内外面共に回転横ナデ、底部回転糸切り	〃	〃	1/8	
9	〃	器高 3.2 口径13.3	内外面共に回転横ナデ	〃	灰白色	1/8	
10	須恵器 蓋	器高 2.2 底径12.6	内外面共に回転横ナデ	緻密	〃	1/4	
11	須恵器 蓋	器高28 底径13.9 撮径 4	内外面共に回転横ナデ	緻密	灰白色	1/8	
12	〃	器高 2.9 底径18.5	内外面共に回転横ナデ	〃	青灰色	1/4	
13	〃	器高 3 底径17	内外面共に回転横ナデ	〃	〃	ほぼ完形	
14	〃	器高 2.8 底径17.4	内外面共に回転横ナデ	〃	灰色	1/8	

第8表 H-6号住居址出土遺物観察表(1)

No.	器種	法量	調整技法	胎土	色調	残存	備考
15	須恵器 蓋	器高 2.7 底径15.3	内外面共に回転横ナデ	緻密	灰色	1/5	
16	〃	器高 4 底径17.3 撮径 4.5	内外面共に回転横ナデ	〃	青灰色	完形	
17	〃	器高 4 底径16.3 撮径 5	内外面共に回転横ナデ	〃	〃	〃	
18	刀子	現在長4.8 幅 1.8 厚さ 3	鉄製			柄部1/5	
19	土師器 甕	器高13.1 口径21.7	外面：口縁部横ナデ、胴部ヘラケズリ。 内面：横ナデ。	細砂粒を含む	赤褐色		
20	〃	器高10.5 口径18.3	外面：口縁部横ナデ、胴部横方向ヘラケズリ。 内面：口縁部横ナデ、胴部横方向ヘラケズリ。	砂粒を含む	〃	口縁部～胴上 部1/4	
21	〃	器高 8.9 口径19.6	外面：口縁部横ナデ、胴部横方向ヘラケズリ。 内面：横ナデ。	〃	〃	〃	胴部にスス付 着
22	〃	器高60 口径21.5	外面：口縁部横ナデ、胴部横方向ヘラケズリ。 内面：横ナデ。	細砂粒を含む	〃	口縁部～頸部 1/4	
23	〃	器高10.4 口径19.2	外面：口縁部横ナデ、胴部横方向ヘラケズリ。 内面：口縁部横ナデ、胴部横方向ヘラケズリ。	〃	〃	口縁部～胴上 部1/4	
24	〃	器高 7.5 口径19.8	外面：口縁部横ナデ、胴部横方向ヘラケズリ。 内面：口縁部横ナデ、胴部横方向ヘラケズリ。	〃	〃	口縁部～頸部 1/4	
25	〃	器高 6.4 口径20.5	外面：口縁部横ナデ、胴部横方向ヘラケズリ。 内面：横ナデ。	〃	〃	口縁部～頸部 1/4	口縁部にスス 付着
26	〃	器高 8 口径22.3	外面：口縁部横ナデ、胴部ヘラケズリ。 内面：横ナデ。	〃	〃	〃	
27	〃	器高 7 口径17	外面：口縁部横ナデ、胴部横方向ヘラケズリ。 内面：横ナデ。	細砂粒を少 量含む	〃	口縁部～頸部 1/5	
28	土師器 甕	器高 6.6 口径15.7	外面：口縁部横ナデ、胴部横方向ヘラケズリ。 内面：横ナデ。	〃	〃	口縁部～頸部 1/5 -	
29	〃	器高24.5 口径20	外面：口縁部横ナデ、胴部不定方向ヘラケ ズリ。 内面：横ナデ、頸部に指腹押存痕が残る			口縁部～胴下 部1/2	外面はくらい
30	土師器 長胴甕	器高12.1 口径32.7	外面：口縁部横ナデ、胴部縦方向ヘラケズリ。 内面：横ナデ、胴部横方向ヘラケズリ。	砂粒を含む	〃	口縁部～胴上 部1/4	
31	土師器 長胴甕	器高 7.2 口径13	外面：口縁部横ナデ、胴部ヘラケズリ。 内面：横ナデ。	砂粒を少量 含む	〃	口縁部～胴上 部1/2	頸部にスス付 着

第9表 H-6号住居址出土遺物観察表(2)

V 遺跡各説

No.	器種	法 量	調 整 技 法	胎 土	色 調	残 存	備 考
1	土師器 坏	器高 3.9 口径 1.4	外面：口縁部横ナデ、底部ヘラケズリ。 内面：横ナデ。	細砂粒を少 量含む	赤褐色	完形	
2	土師器 長胴壺	器高 7 口径22.4	外面：口縁部横ナデ、胴部縦方向ヘラケズ リ。 内面：横ナデ。	〃	〃	口縁部～頸部 1/5	

第10表 H-7号住居址出土遺物観察表

No.	器種	法 量	調 整 技 法	胎 土	色 調	残 存	備 考
1	土師器 坏	器高 4.6 口径14.8	外面：口縁部横ナデ。体底部ヘラケズリ。 内面：横ナデ。	細砂粒を含 む	赤褐色	1/5	外内の一部に スス附着
2	須恵器 坏	器高 4.4 口径12.4 底径 8	内外面共に回転横ナデ	緻密	灰褐色	1/2	外面にスス付 着
3	須恵器 蓋	器高 3.6 口径17.8 撮径 6	内外面共に回転横ナデ	〃	灰白色	完形	撮が大きい
4	青銅製 金 具						

第11表 H-8号住居址出土遺物観察表

No.	器種	法 量	調 整 技 法	胎 土	色 調	残 存	備 考
1	須恵器 坏	器高 3.7 口径13.7 底径 8.6	内外面共に回転横ナデ、底部回転糸切り	緻密	灰白色	1/5	
2	〃	器高 3.3 口径12.4 底径 6.9	内外面共に回転横ナデ、底部回転糸切り	緻密	〃	ほぼ完形	
3	〃	器高 3.5 口径13 底径 6.9	内外面共に回転横ナデ	細砂粒を少 量を含む	灰褐色	1/5	墨書
4	〃	底径 7	底部回転糸切り	〃	灰白色	底部1/5	
5	須恵器 皿	器高 3 口径 4.4 底径 7.8	内外面共に回転横ナデ、底部回転糸切り	緻密	灰色	1/5	
6	土師器 甗	器高 2.7 口径 9.5	外面：口縁部横ナデ、胴上部ヘラケズリ。 内面：横ナデ。	砂粒を少量 を含む	赤褐色	口縁部～胴上 部1/5	

第12表 グリッド出土遺物観察表

VI 成果と問題点

1 野殿北屋敷の成立時期について

野殿北屋敷の西側の堀（M-1号堀）の調査により、いくつかの事柄が明らかになったので、少し整理してみることにする。

M-1号堀の平面形をみると、調査した62mの間に「折」は全く存在せず、さらに調査区の北側においても、「折」は現状では確認できない。また、規模についてみると、深さ1間（1.8m）中段の部分で1.5～2間（2.7～3.6m）であり、比較的小規模である。そして、東側（内側）斜面には堀を開鑿した際か、堀さらいを行った際に作られたとみられる作業用道路がそのまま残っておりM-1号堀の防禦の機能を低下させている。

また、土層堆積状態を観察すると、数回の堀さらいの痕跡がみられ、その後あまり時間の経過を経ない段階でAs-Aが堆積している。これは江戸時代になってからもM-1号堀が使用されていたことを示している。また、「寛永通宝」も下層から検出されており、これを裏付けている。

以上のことから、M-1号堀は中世まで遡る根拠はほとんどなく、近世の前半段階に開鑿されたと考えられる。また、堀中に井戸を有していることから、農業用として使われた可能性が高く、戦闘を前提として造られていないと判断される。したがって、野殿北屋敷の成立は伝承のとおり、近世初期に小幡氏によって造られたものと推定される。

2 西殿遺跡における集落の変遷について

西殿遺跡では7世紀後半から10世紀後半までの住居址10軒が検出された。これらの住居址は出土遺物から大きく2期に分けることができる。I期は7世紀後半から8世紀前半までの段階で、H-1号、2号、7号、8号、10号の5軒の住居址が存在する。次にII期は9世紀の後半段階であり、H-4号、5号、6号、9号の4軒の住居址が存在する。また、H-3号住居址は遺物が検出されていないので、時期は不明であるが、位置からII期に該当する可能性が高い。

次に住居址の切り合い関係についてみると、I期ではH-1号住→H-2号住とH-7号住→H-8号住という2つの切り合い関係が認められる。また、II期ではH-6号住→H-5号住とH-3号住→H-9号住という2つの新旧関係が認められる。そして、H-10号住→HT-1号掘立柱建物址という切り合い関係が認められる。一方、M-1号溝は土層の堆積状態から南側が内側になると判断され、これを掘った土砂によりH-10号住居址が人為的に埋められ、その上にHT-1号掘立が作られたとみられる。これらのことから、M-1号溝、HT-1号掘立柱建物

VI 成果と問題点

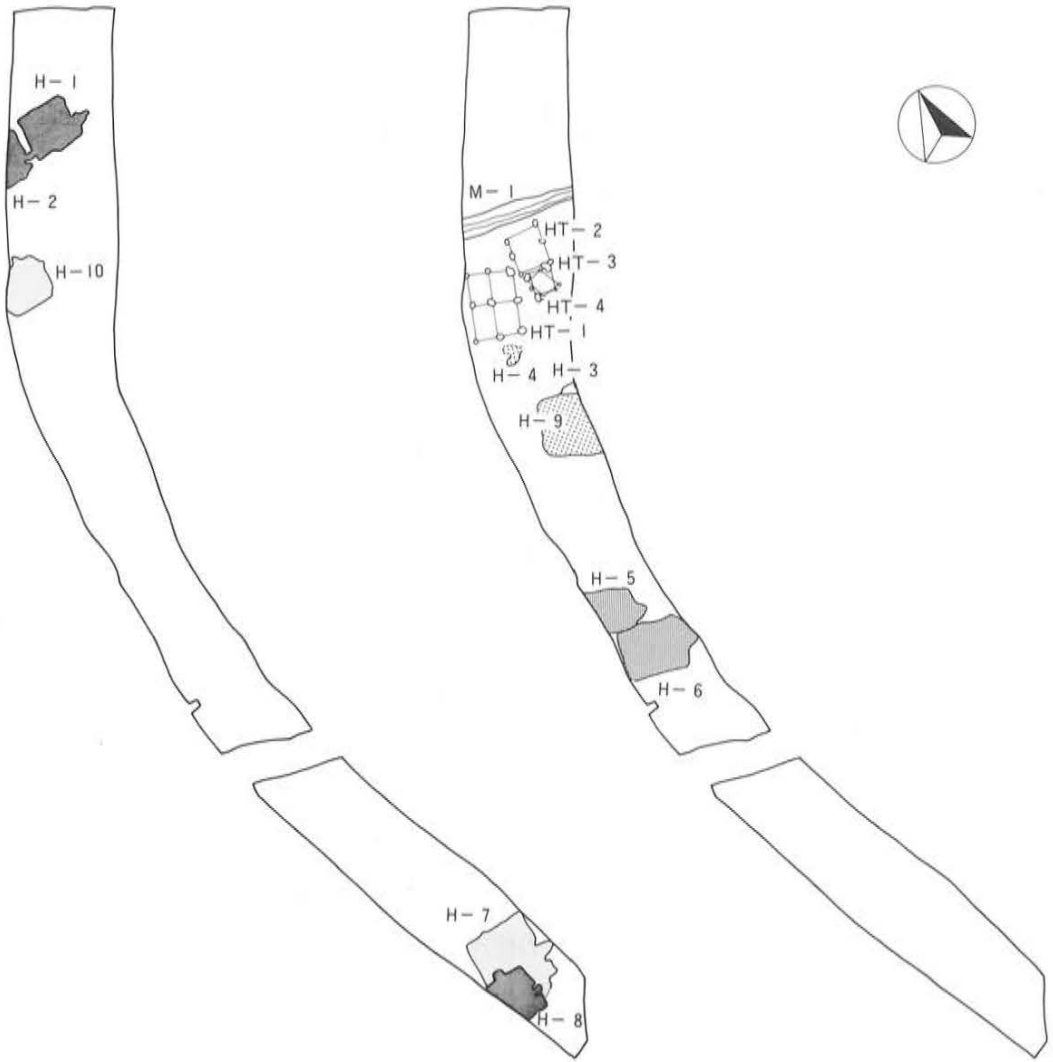
址はII期に該当する遺構と考えられる。また、HT-1号掘立に隣接するHT-2～4号掘立も位置的にみて、II期のものと推定される。

以上のことから西殿遺跡における集落の変遷についてみると、第32図のようになる。I期には住居は調査区の北部と南端部に偏って存在し、中間部には全く存在しない。また、I期はさらに出土遺物から、I a期（7世紀第3四半期）とI b期（7世紀第4四半期～8世紀第1四半期）に細分することができる。I a期の住居址はH-10号住、H-7号住でありI b期の住居址はH-8号住、H-1号住、H-2号住である。一時期に同時存在した住居は2軒であったと推定される。

次にII期についてみると、II期では北側を溝によって区画され、調査区の中央に住居、掘立柱建物が集中する集落形態をとる。そして、調査区の南半分には全く遺構が存在しない。II期もさらにII a期（9世紀第3四半期）とII b期（9世紀第4四半期）に細分することができる。II a期の住居址はH-6号住、H-5号住であり、II b期の住居址はH-9号住、H-4号住である。しかしII a期ではH-6号住とH-5号住が切り合っており、一時期に存在した住居は1軒である。また、II b期でもH-9号住とH-4号住は近接しており、同時に存在していたかどうかは判然としない。したがって、II期では同時存在した住居は1～2軒程度と推定される。また、掘立柱建物も切り合いをもっており、同時期には1～2棟が存在した程度とみられる。

以上、西殿遺跡の集落の変遷についてみてきたが、今回の調査は路線幅での範囲と限定された部分を調査したに過ぎず、集落の全体像については到底迫れるものではない。しかし、今回の調査区からはI期とII期の間の約150年間の遺構は全く検出されておらず、また、I期以前、II期以降についても同様であり、遺物も存在しない。特にII期以降についてみた場合、As-B直下では耕作を行った痕跡は全く確認することができない。こうした状況から考えて、西殿遺跡は継続して営まれた集落ではなく、断続的に2時期に形成された集落であると推定される。また集落の形態はI期では散村形態、II期では集村形態に近い状態であったと考えられる。

2 西殿遺跡における集落の変遷について



- | | |
|--|---|
| I 期 | II 期 |
| <p>□ I a 期
(7世紀第3四半期)</p> <p>■ I b 期
(7世紀第4四半期 8世紀第1四半期)</p> | <p>■ II a 期
(9世紀第3四半期)</p> <p>▨ II b 期
(9世紀第4四半期)</p> |

0 20m

第32図 西殿遺跡の集落変遷

3 住居址の壁外柱穴について

今回の調査により、H-1、H-2、H-10号住居址3軒より、壁外柱穴が検出された。3軒とも確認面からの掘込みも深く、遺存状況は良好であった。いずれの住居址においても、壁の方向に平行に並ぶ形で検出され、住居址の上部構造を知る上で、良好な資料を得ることができた。以下、それぞれの住居址についてみて行きたいと思う。

(1) H-1号住居址

本住居址において、住居に伴なうと思われる壁外柱穴は、数十基検出することができた。その中で、確実に住居に伴なうと考えられる柱穴については、スクリントーンにより区別してみた。

まず、住居南西に位置する2対の柱穴列であるが、平面形のばらつきは多少あるものの、深さ底径についてはほぼ同じである。また、住居址の主軸方向に対してほぼ直角で、柱穴が3基ずつ向い合う形で位置している。遺構の所でも述べたように、この部分が本住居における出入口であり、出入口部分の上屋を支える柱の主穴とみることができる。

次に、カマド部分であるが、カマドをはさみ、対になる柱穴がある。図のように、アルファベットによりその対応を示した。b-b'については、確実な対応がみられるが、a-a'についてはa'に対応する柱穴がどの柱穴なのかははっきりとしない。平面的に対応をみた場合、歪が出るものの、カマドの主軸方向、a'-b'の方向等から、aをa'に対応する柱穴とした。この部分も、出入口と同様、何らかの上部構造が存在したと思われる。

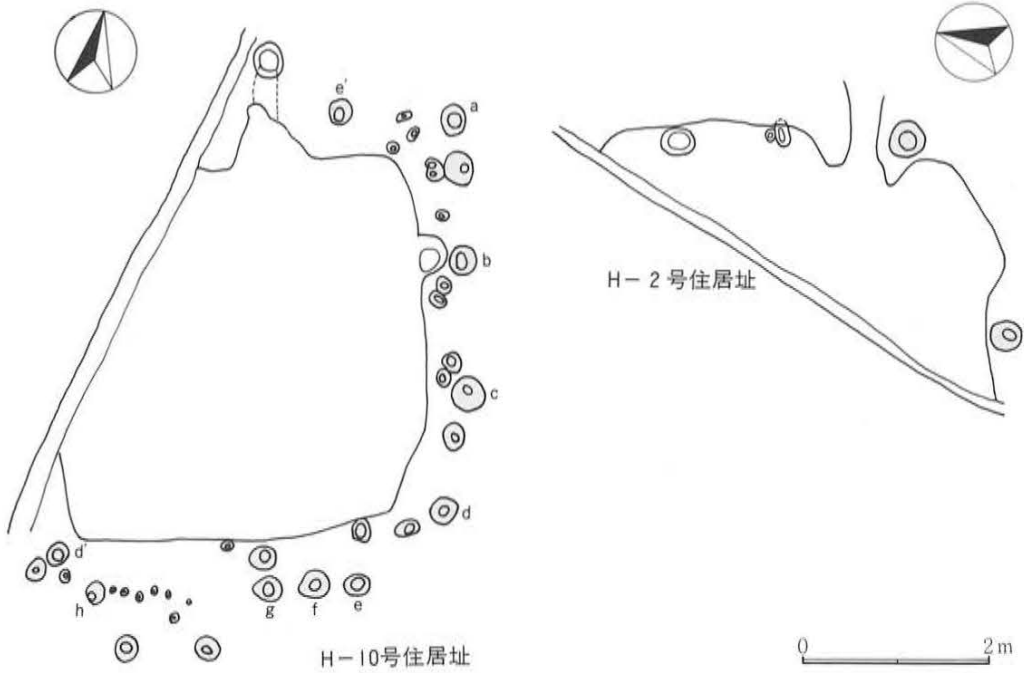
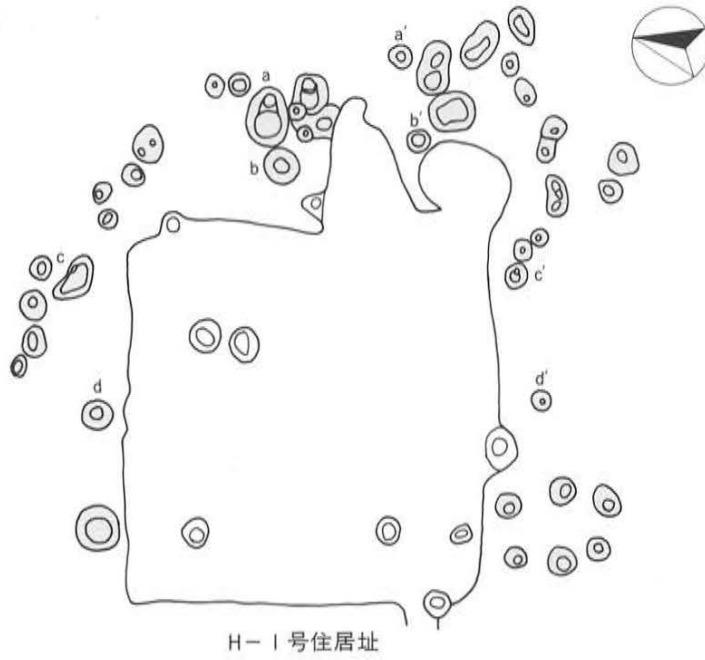
この他、住居の壁に平行して柱穴が並ぶ。この柱穴は、住居をはさんで対になるものもあり(C-C'、D-D')住居内の柱穴のみではなく、住居壁外にも住居の上部構造を支えていた柱が存在したことが考えられる。

(2) H-2号住居址

本住居址は、 $\frac{2}{3}$ 程が調査区外のため、壁外柱穴は2基検出されたのみである。1基はカマド煙道南側、もう1基は南壁南側である。2基のみのため、対応や方向性から明確に本住居に伴うとは言えないが、柱穴の規模や、H-1号住と時期的に近いことから、本住居の上部構造に関与した柱穴と考えられる。

(3) H-10号住居址

本住居址は、北西部分が調査区外となったが、壁外柱穴は、数十基が検出された。いずれも、住居の壁に平行して並び、a、b、c、dについては、柱間がほぼ等間隔である。恐らく、bに



第33図 H-1号、H-2号、H-10号住居址壁外柱穴

VI 成果と問題点

対応する b' が検出されていることから、調査区外の西壁沿いには、a、b、c に対応する柱穴が存在するものと思われる。次に、e、f、g、h については、e と g の北側に柱穴が 1 基ずつあり、長方形の区画を作っている。また e、f、g は等間隔であるが、g と h の間にはかなりの間隔があり、小ピットの列が 2 列検出されている。この他、e～h 列に平行し、南側に 2 基柱穴がある。このように住居南側の柱穴については、単に上部構造を支える柱だけではなく、入口等の施設が存在した可能性がある。

(4) 小 結

今回は、壁外柱穴が確認された住居址が 3 軒と、資料数としては少なかったが、良好な資料が得られたと思う。壁の外側に上部構造を支える柱があるならば、少なくともその柱から壁までの間は住居内であり、当然その間を、柵のように物を置く等、何らかの用途に使用している可能性は十分あり得ることで、土器の流れ込み、投棄等、遺物の帰属性において問題はあがるが、住居内の遺物と、住居周辺の遺物との接合関係等を注意深くみてゆく必要がある。今後、住居内のみならず住居周辺にも十分注意を払い、住居の構造について考えてゆくべきである。

住居の構造については、中筋遺跡・黒井峯遺跡で良好な資料が検出されている。中筋遺跡では、垂木の太さ、垂木の間隔、カヤの葺き方、屋根の構造までが明らかとなり、堅穴住居の周堤も確認されている。黒井峯遺跡においても軽石の推積順序から上部構造を復元している。また堅穴住居の周堤帯も確認されている。周堤帯についてはこの他に、熊倉遺跡・保渡田・荒神前遺跡で確認されている。

本遺跡は、中筋遺跡や黒井峯遺跡のように軽石が厚く推積し良好な埋没状況を示すわけではなく、ごく一般的に見られる平安時代の住居址であるが上部構造を知る手がかりとなる壁外柱穴を確認することができた。今後、住居の調査にあたり、遺存状況の良否に関係なく住居址壁外にも注意をはらってゆく必要があろう。

4 墨書土器について

本遺跡より墨書土器は 1 点出土した。出土位置は、J-2、B グリッドの遺構確認面上で、H-9 号住居址のすぐ脇で検出された。須恵器杯の底部破片で、底部外面に墨書により「太」の文字が書かれている。

県内における類例は、十三宝塚遺跡出土の 2 点だけであった。これらは 2 点とも土師杯で、1 点は体部内面と底部外面に、もう 1 点は底部外面に墨書が位置しており、位置的には本遺跡と同様である。しかし、十三宝塚遺跡の 2 点は共に、側筆的用筆で書かれているのに対し、本遺跡の墨書は、中鋒的用筆で書かれている。また、本遺跡の墨書は、筆の入り方、運び方等から見て、

かなり文字を知っている人物によって書かれたものと言うことができそうである。

出土位置がH-9号住居址の脇ということから、H-9号住との関係も考えられる。H-9号住の出土遺物をみると、鍬3点、砥石1点と、他の住居址より全く出土しない物を多く持つという特殊性から考え、この墨書土器が、H-9号住に伴うものであったことは十分に考えられる。

次に、「太」の文字の示す意味であるが、地名、寺院関係、官職名、吉祥等が考えられるが、該当するものがなく、また底部の破片であり文字が2字の可能性もあり、現段階において意味は不明である。

VI 成果と問題点

参 考 文 献

- 石井克己 1986 『黒井峯遺跡確認調査概報』 子持村教育委員会
- 上原啓己、小林敏夫他 1986 『大久保A遺跡』 群馬県教育委員会、吉岡村教育委員会
- 大塚昌彦他 1987 『中筋遺跡発掘調査概要報告書』 洪川市教育委員会
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1987 『埋文群馬No.1』 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 小出義治、玉口時雄他 1981 『シンポジウム盤状杯』 相武古代研究会、東洋大学未来考古学研究会
- 高麗 正、千田茂雄他 1986 『古八幡遺跡』 三鷹市遺跡調査会
- 坂口 一、三浦京子他 1986 「奈良・平安時代の土器の編年」 『群馬県史研究』24 群馬県史編纂委員会
- 志村 哲、前原 豊他 1982 『堀ノ内遺跡群』 藤岡市教育委員会
- 玉口時雄、小金井靖他 1984 『土師器 須恵器の知識』 考古学シリーズ17 東京美術
- 中東耕志、下城 正他 1986 『洞Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 能登 健他 1984 『熊倉遺跡』 六合村教育委員会
- 若狭 徹他 1986 『保渡田東遺跡』 群馬町教育委員会

野殿北屋敷

山 崎 一

安中市野殿の中央部に近い独立標高228.1m附近には、50年度前までは人家がなく、そこに神明の祠があって、東南100mに宗泉寺が建っている。

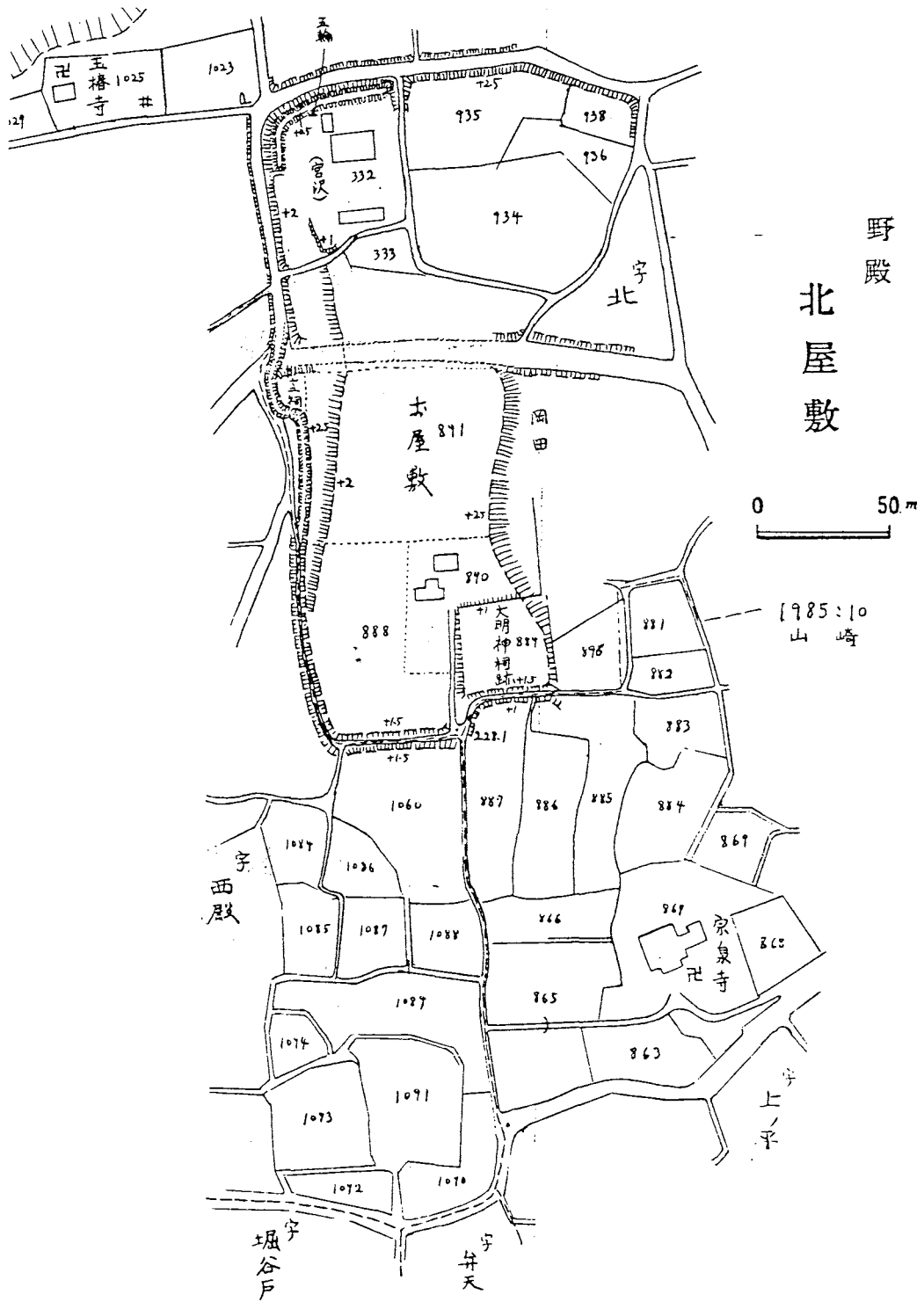
神明祠を含む東西90m、南北140mの所を「おやしき」と呼び、東面は低地にのぞみ、他の三方に堀跡が認められる。南北に二分されていたように見えるが境に堀跡などは見当たらない。「地籍は北野殿の字北888番地から891番地に当る。」

西北部は1.5m乃至2m低い腰郭状となり、西北角は張り出して、そこに十二様の碑などが立っている。屋敷神だったのであろう。このあたりは小幡氏の旧蹟と推定する。

南100mの1.091番地を中心とする方80mの所も古屋敷跡であろう。

位置と言ひ、社寺の配置と言ひ、道路の分布と言ひ、領主小幡氏関係の遺跡と推定される。郡村誌を見ると「甘楽郡國峯在城小幡氏累世所領シ、……徳川氏其名家ナルヲ想ヒ逐ニ小幡氏ヲ旗下ニ列セラシ、旧領ノ内本村ノ高千石ヲ采邑ニ与ヘラル。同三郎左衛門昌重、同上総介重厚ニ至、承応二巳年弟市郎左衛門ヲ分家シテ高貳百石ヲ分与ス。両家累世相継采地タリ。」と記されている。

「おやしき」北側の道は近年の堀開であって、その北、東西140m、南北100mの地籍も亦、中世屋敷址で、東、北、西をめぐる道は堀跡であろう。西北縁に土居が残り、そこに中世の小形五輪塔が2基ある。今、宮沢氏が住み、400年以上居住と伝承する。西北外側にある玉椿寺は、宮沢氏の菩提所だが火災に遭い、新しいお堂が建てられている。



第34図 野殿北屋敷縄張図



M-1号堀全景



野殿北屋敷遠景



M-1号堀3区



1号井戸



2号井戸



M-1号堀土層断面

図版一 2



西殿遺跡遠景(調査前)



調査区(南部)



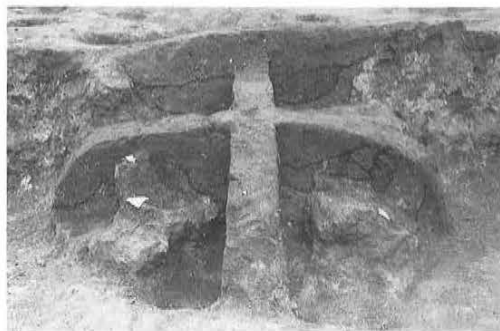
調査区(北部)



調査区(中央部)



H-1号住居址、H-2号住居址



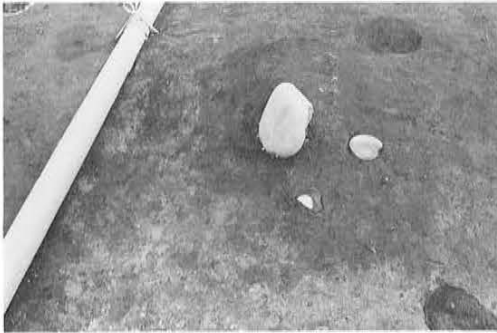
H-1号住居址カマド



H-2号住居址カマド(1)



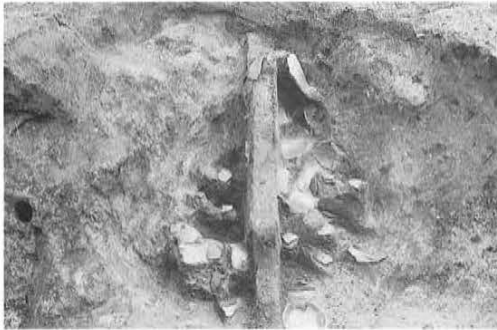
H-2号住居址カマド(2)



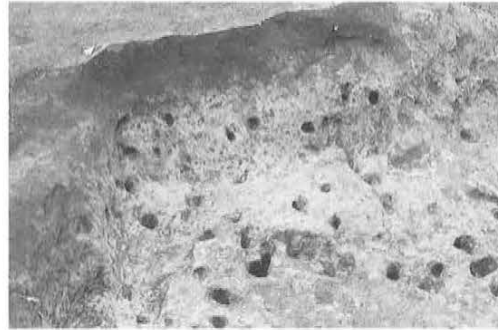
H-4号住居址カマド



H-5号住居址



H-5号住居址カマド



H-5号住居址棚状遺構



H-6号住居址



H-6号住居址遺物出土状況

図版— 4



H-6号住居址遺物出土状況(蓋)



H-6号住居址カマド



H-7号住居址、H-8号住居址



H-7号住居址、H-8号住居址遺物出土状況



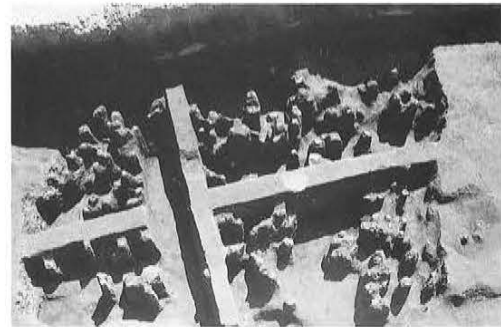
H-8号住居址カマド



H-8号住居址青銅製金具出土状況



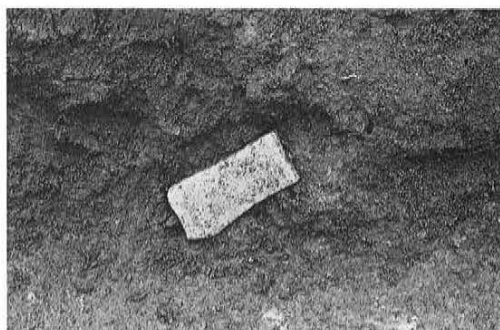
H-3号住居址(奥)、H-9号住居址(手前)



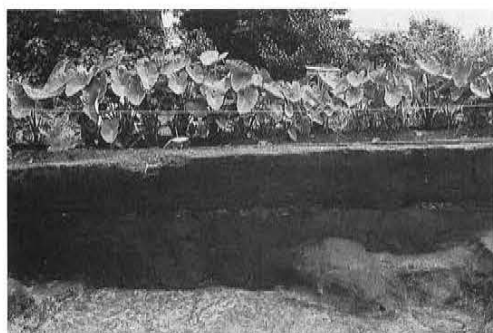
H-9号住居址遺物出土状況



H-9号住居址鎌出土状況



H-9号住居址砥石出土状況



H-9号住居址土層断面



H-9号住居址カマド



H-9号住居址カマド土層断面(1)



H-9号住居址カマド土層断面(2)



H-10号住居址



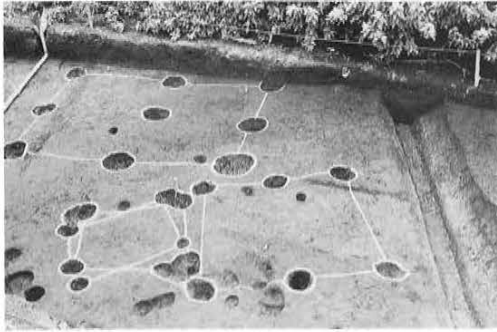
H-10号住居址遺物出土状況(坏)



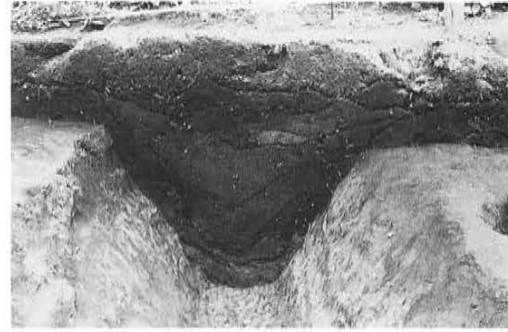
H-10号住居址土層断面



H-10号住居址カマド



HT-1、2、3、4号掘立柱建物址



M-1号溝土層断面



M-1号溝全景



M-1号溝遺物出土状況



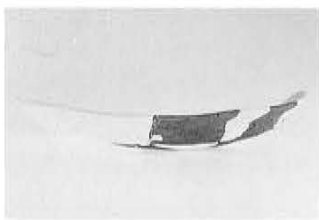
H-1号住居址出入口部分



M-1号堀調査スナップ



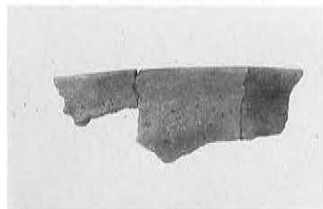
H-1号住居址 坏



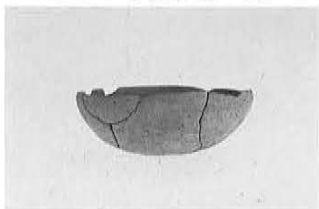
H-1号住居址 坏



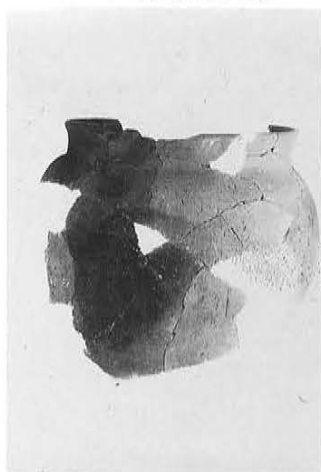
H-1号住居址 坏



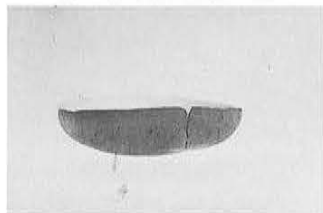
H-1号住居址 甗



H-2号住居址 坏



H-1号住居址 甗



H-2号住居址 坏



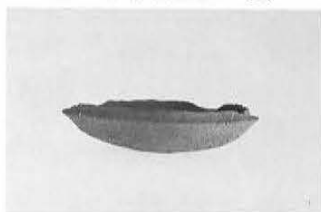
H-2号住居址 甗



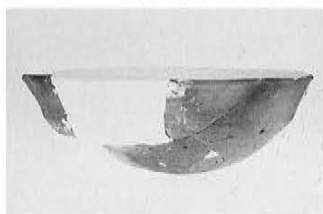
H-2号住居址 甗



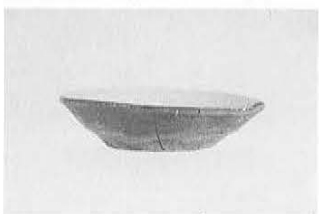
H-2号住居址 甗



H-10号住居址 坏



H-10号住居址 坏

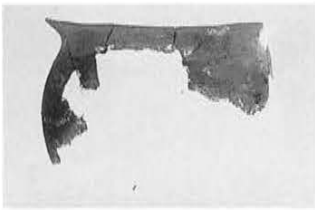


H-9号住居址 坏

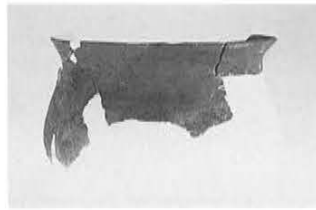


H-9号住居址 坏

図版—10



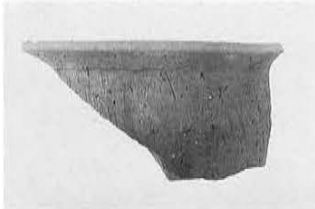
H-6号住居址 甗



H-6号住居址 甗



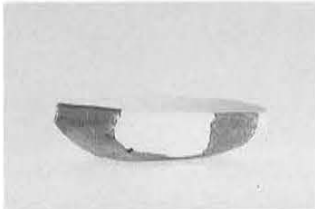
H-6号住居址 甗



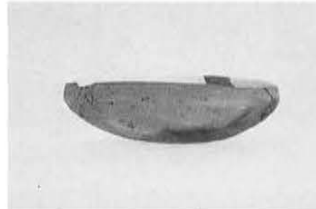
H-6号住居址 甗



H-6号住居址 甗



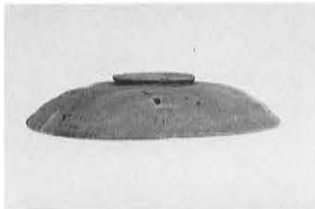
H-7号住居址 坏



H-8号住居址 坏



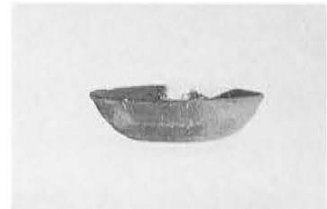
H-8号住居址 坏



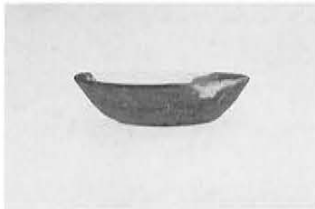
H-8号住居址 蓋



H-8号住居址 青銅製金具



グリッド 坏



グリッド 坏



グリッド 坏



グリッド 墨書土器(1)



M-1号堀 古銭



M-1号堀 陶磁器



グリッド 墨書土器(2)

野殿北屋敷・西殿遺跡

一県営農免農道整備事業野殿地区に伴う
岩井、野殿地区遺跡群発掘調査報告書一

発行日 昭和63年3月10日

編集・発行 安中市教育委員会
群馬県安中市安中1丁目23-13

印刷 朝日印刷工業株式会社